

コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）

報告書

2018 年 4 月～2019 年 3 月



目次

まえがき	2
1. 主催企画	3
1.1 研究プロジェクト「コンゴにおける資源採掘と人権侵害の実態調査」	4
1.2 ノエル・ツィアニ氏講演会「紛争影響地域の住民を支える開発援助のあり方」	7
1.3 「コンゴの経済発展と安全保障」国際会議「コンゴ民主共和国の経済と開発における組織の役割」	8
1.4 『女を修理する男』上映会@南山大学	9
1.5 ムクウェゲ医師ノーベル平和賞受賞記念フォーラム「コンゴの課題を考える」	10
2. ムクウェゲ医師ノーベル平和賞受賞に関する活動報告	11
2.1 ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞に関する記者会見	12
2.2 ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞への公式コメント発表	14
2.3 ノーベル平和賞授賞式 & 関連イベントへの参加	1515
3. 招待講演／映画上映会／DVD 発売	177
3.1 招待講演	17
3.2 映画上映会	199
3.3 『女を修理する男』日本語字幕付き DVD 販売数	20
4. ASVCC ユース	21
4.1 ASVCC ユース活動報告	21
4.2 ASVCC ユース 主催 映画『女を修理する男』上映会&講演会	22
4.3 ユースメンバーの声	23
5. メディア掲載	24
5.1 新聞記事	24
5.2 執筆記事	25
5.3 テレビ出演	2525
6. 会計報告（2018 年 4 月～2019 年 3 月）	2626
付録 1：ムクウェゲ医師によるノーベル平和賞受賞スピーチ全文	27
付録 2：主要なメディア掲載記事	31
謝辞	52

まえがき

2016 年 3 月、任意団体「コンゴの性暴力と紛争を考える会」(Association on Sexual Violence and Conflict in the DR Congo: ASVCC) が設立されました。その目的は、コンゴ民主共和国（以下、コンゴ）の性暴力と紛争鉱物、そしてグローバル経済の関係性に初めて焦点を当てたドキュメンタリー映画『女を修理する男』（原題：The Man who Mends Women）の上映と学生との研究会を通して、この問題に関する認識を広めることにありました。主な実績は、2016 年度に全国 29 カ所における映画上映（3000 人鑑賞）、デニ・ムクウェゲ医師の来日の実現、2017 年度には『女を修理する男』の日本語字幕付き DVD の制作です。それに加えて、ASVCC が主催・共催した一般公開の講演会やセミナーは計 12 回に上り（総計 900 名参加。そのうち 1 回はベルギーで開催）、コンゴにおける性暴力と紛争鉱物に関する執筆と研究も続けました。

活動 3 年目に入った 2018 年度は、研究分野において、コンゴの安全保障と経済発展に関するフランス語書籍を出版しました。フランス語で出版したことにより、コンゴ人研究者・実務家との議論が一層深まることが期待されます。残念ながら日本語での出版は未定ですが、この 3 年間でコンゴにおける紛争下の性暴力に関する認知度は飛躍的に向上しました。その理由は、2018 年 10 月にデニ・ムクウェゲ医師がイラク人活動家のナディア・ムラド氏とともにノーベル平和賞を受賞することが発表されたからです。2017 年後半に始まった「# Me Too 運動」のうねりが日本にも多少広まり、2018 年は平時と紛争下という両方の状況における性暴力に関して注目が集まった年といえるでしょう。ASVCC のメンバーが、新聞、ウェブメディア、雑誌、テレビを含むメディアの取材を受けたり、記事を執筆したりしました。ASVCC のメンバーによる執筆物は計 40 に上っています。また 10 月以降、『女を修理する男』の日本語字幕付き DVD の販売数が前半期（2018 年 4～9 月）の約 6.5 倍に増加しました。その内訳は、教育機関用 71 枚（69 の教育機関が購入）、個人鑑賞用が 309 枚です。また、『女を修理する男』の上映会が全国 69 回で開催され、12,581 名が鑑賞しました。そのうち 8 か所で ASVCC のメンバーが解説をしました。

2018 年度の活動には、2016 年度・2017 年度と比較して 3 つの特徴があります。

1 点目は、2016 年度に開催された映画上映会は主に大学主催であり、そのほとんどは、ASVCC の呼びかけによるものや、ASVCC が始めた上映会が拡大したものでしたが、**2018 年度の上映会は、個人や団体などによる自主主催が 85%であったことです。**

2 点目は、これまでメディアによる報道は、全国・地方新聞とウェブメディアが中心でしたが、**テレビ番組や雑誌などにも拡大したことです。**

そして 3 点目は、**ASVCC の現役学生メンバーと、大学を卒業した ASVCC の発起学生メンバーが「ASVCC ユース」を立ち上げ、勉強会や一般公開セミナーを開催したこと、および、ASVCC のメンバーが在住している北陸・富山を中心に地方における活動が拡大したことです。**

これらのことから、ノーベル平和賞をきっかけに、ASVCC の研究や活動が、# Me too 運動を通して「平時における性暴力」は知っていた、あるいは関心を抱いていたが、コンゴなどで起きている紛争下の性暴力の問題を知らなかったなどの層などに対して知的貢献を行ったことは最大の実績だったと言えます。

その意味で、ノーベル平和賞の影響力は偉大ですが、それが一発花火で終わらないよう、ASVCC は、今後も性暴力と紛争鉱物、そしてグローバル経済の問題への理解が深まるように努力を続けたいと考えています。

最後に、資金協力をしてくださった高木仁三郎市民科学基金と個人寄付者の皆様、そしてさまざまな形で支援してくださった皆様に感謝の意を述べたいと思います。

2019 年 5 月 コンゴの性暴力と紛争を考える会 代表 米川正子

1. 主催企画

2018 年度にコンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）が主催した企画は以下の 4 件であった。

1.1 研究プロジェクト「コンゴにおける資源採掘と人権侵害の実態調査」

1.2 2018 年 5 月 22 日（月） 東京大学本郷キャンパス
「コンゴの紛争資源問題からとらえるビジネスと人権」シリーズセミナー第 7 回
ノエル・ツィア二氏講演会「紛争影響地域の住民を支える開発援助のあり方」

1.3 2018 年 9 月 29 日（土） メルキュール・ブリュッセル・センター・ミディ・ホテル（ベルギー）
第 3 回「コンゴの経済発展と安全保障」国際会議
「コンゴ民主共和国の経済と開発における組織の役割」

1.4 2018 年 12 月 16 日（土） 南山大学
『女を修理する男』上映会

1.5 2019 年 1 月 31 日（金） 文京シビックホール
ムクウェゲ医師ノーベル平和賞受賞記念フォーラム 「コンゴの課題を考える」

1.1 研究プロジェクト「コンゴにおける資源採掘と人権侵害の実態調査」

(1)実施期間：2018 年 4 月～2019 年 3 月

(2)実施者：米川正子 立教大学特定課題研究員／ASVCC 代表

華井和代 東京大学講師／ASVCC 副代表

ジャン＝クロード・マスワナ 筑波大学特任准教授／Japan Africa Business 代表取締役／

ASVCC アドバイザー

(3)研究主題：コンゴにおける資源採掘と人権侵害の実態調査

(4)研究目的

本研究プロジェクトは、世界有数の資源産出国であるコンゴ民主共和国（以下、コンゴ）において資源採掘と地域住民への人権侵害が結びついている現状を明らかにし、世界有数の資源消費国である日本の政府、企業、市民が責任ある行動をとるための提言を行うことを目的としている。

(5)研究の背景

コンゴでは、1996 年に第一次コンゴ紛争、1998 年に第二次コンゴ紛争が発生して「アフリカ大戦」と呼ばれるまでに拡大した後、2002 年末に和平合意が成立し、公式には紛争が「終結」したとされている。しかし実際には 2003 年以降も、隣国ルワンダの反政府武装勢力や、それに対抗する武装勢力、地元のエスニック・グループを基盤とする武装勢力など、数多くの紛争主体がコンゴ東部での武力闘争を続けている。それに加えて、本来は住民を守るべきコンゴ国軍兵士や警察官までもが人権侵害を行っている。

こうした武装勢力や軍が資金源として利用してきたのが、コンゴ東部で採掘されるスズ、タングステン、 tantalum、金といった鉱物資源である。武装勢力や軍は、鉱山での採掘や輸送に違法な「税」を課して利益を得る一方、鉱山周辺を支配する方法として、地域住民に暴力を奮っている。そうした暴力のひとつが、ムクウェゲ医師が実態を訴えている組織的な性暴力である。働き者で生活の中核を担う女性たちに残虐な性暴力を行うことで、家庭やコミュニティを破壊し、抵抗力を失わせることをねらっている。

本問題に対して、国際社会が無策だったわけではない。国連は 2 万人規模の平和維持活動（PKO）をコンゴに展開してきた。さらに、鉱物が紛争の資金源にならないように、2010 年には経済協力開発機構（OECD）が紛争鉱物に関するデュー・ディリジェンス・ガイダンスを策定し、同年にアメリカでは金融改革法（通称ドッド・フランク法）の 1502 条において紛争鉱物取引規制が導入された。こうした対応によってコンゴ東部の鉱山の 6 割以上から紛争主体が撤退したと NGO は報告している。

しかし、こうした取り組みにもかかわらず、コンゴ東部での人権侵害行為は停止していない。鉱山から武装勢力を撤退させれば紛争状況は収束するという当初の予想に反して、コンゴ東部で活動する武装勢力の数は 70 以上に増加し、性暴力の件数は 2016 年の 2593 件から 2017 年の 5783 件に増加（UNFPA）、2018 年には新たに 45 万人以上が国内避難民となった（UNHCR）。規制によって鉱山から武装勢力が撤退しても紛争が終わらず、住民に対する人権侵害が止まないのはなぜか。その要因を理解するためには、1996 年から 20 年以上におよぶ紛争の中で、鉱物をめぐるとの利権関係が形成され、住民の人権侵害を継続させるような社会構造が構築されたのかを解明する必要がある。

(6) 2018 年度の調査研究内容

2018 年度は、高木仁三郎市民科学基金の研究助成を得て、以下の 5 部から構成する調査研究を行った。

①文献・資料調査

まずは既存の情報を収集・分析するため、以下の文献・資料の収集・分析を行った。コンゴ東部の紛争資源問題と性暴力に関する先行研究。世界銀行や各国援助機関による公開資料・プロジェクト報告書。コンゴ東部から発信される情報および国連専門家グループや NGO の報告書。企業や業界団体の公開資料。

②紛争鉱物取引規制に関する聞き取り調査

日本国内の製錬・精錬業者や電子機器企業への聞き取り調査を行い、紛争鉱物調達調査の実施状況を把握した。また、電子情報技術産業協会（JEITA）「責任ある鉱物調達検討会」に出席し、電子機器企業における紛争鉱物調達調査の担当者と情報共有・意見交換を行った。さらに、9 月にルワンダを訪問し、鉱物の原産地認証を行っている機関への聞き取り調査を行った。

③コンゴ東部における性暴力の実態調査

コンゴ東部における性暴力の実態を、パンジ病院で性暴力被害者の救済に尽力するムクウェゲ医師、パンジ病院で治療を受ける性暴力被害者、および元加害兵士への聞き取り調査からとらえた（研究協力者を通じて実施）。

④コンゴにおける政治状況の分析

2016 年 12 月にジョゼフ・カビラ前大統領の憲法上の任期が満了して以降、コンゴでは政治の転換期を迎えている。2018 年 12 月 30 日には議会選挙・大統領選挙が行われ、フェリクス・チセケディ新大統領への政権交代が行われた。しかし、票集計での不正が明らかになり、政治的混乱が発生している。こうした政治的混乱がコンゴ東部におよびる影響を、現地のメディア情報や NGO の報告を分析することでとらえた。

⑤公開セミナー・国際会議の開催

※イベントの概要は 1.2～1.5 で報告する。

(7) 得られた調査結果

2018 年度の調査研究を通じて、3 つの結論を導き出した。

①紛争鉱物取引規制の問題点

鉱物サプライチェーンの下流に位置する日本企業は、自社のサプライチェーンから紛争鉱物を排除するための紛争鉱物調達調査を実施している。しかしながら、サプライチェーンの上流と下流における接続の不備によって、規制は資源産出地域における紛争経済の転換を実現できていない。

日本における紛争鉱物調達調査は、統一調査用紙を用いて網羅的に実施されている。しかし、国連専門家や NGO、現地メディアの情報では、コンゴからルワンダとウガンダへの密輸が横行していることが指摘されている。また、ルワンダで行った聞き取り調査でも、ルワンダ国内で認証されている鉱物の一部に、認定外の鉱山からの鉱物が紛れ込んでいる可能性が指摘された。

こうした情報に基づくと、サプライチェーンの下流に位置する企業による紛争鉱物調達調査が規制に則して実施されている一方で、サプライチェーンの上流における鉱物がバナンスには大きな問題があり、下流からの取り組みによって紛争経済を転換させることは極めて難しいと言えよう。さらに、リサイクルが多い金では原産地の認定が困難を極めて

②コンゴ東部での人権状況の悪化

研究協力者を通じて行ったパンジ病院での聞き取り調査などから、コンゴ東部の人権状況が、2016 年末から 2018 年にかけて悪化していること、および、大統領選挙をめぐる政治的混乱が人権侵害の増加に結びついていることが明らかになった。2016 年半ばまで減少傾向にあった市民への暴力や性暴力は 2016 年末から再び増加し、また、暴力の発生地域が拡大している。ムクウェゲ医師の調査によれば、2016 年末にカビラ前大統領の憲法上の任期が満了して以降、選挙の実施を求める抗議活動と警察による鎮圧行動が激化し、それにとまってパンジ病院に運ばれる性暴力の被害者数が増加した。政治的不安定が人権侵害の増加に直結しているのである。

さらにムクウェゲ医師をはじめとするパンジ病院の医師は、性暴力被害者の年齢が低下している傾向を指摘している。こうした報告は、欧米研究機関の報告データと一致している。ムクウェゲ医師がコミュニティレベルで収集した「性暴力は武装勢力のみならず、国軍や警察と地元の権力者の癒着によっても起きている」という証言は、国連の報告書とも一致している。

同じく研究協力者を通じて行った元加害兵士への聞き取り調査では、住民への性暴力が武装勢力内部での「義務」となっていたことが証言として得られた。調査対象者は、上官からの命令によって 200 名を超える女性を暴行した後で逮捕され、禁固 5 年の実刑判決を受けたものの、保釈金の支払いによって 4 か月で釈放されている。国連専門家グループは、2018 年 9 月に発生した、武装勢力による組織的性暴力事件を報告しているが、こうした武装勢力による「紛争の武器」としての性暴力が、武装勢力の間で定着していること、たとえ司法に裁かれても、わずか数カ月で保釈されるなど、「不処罰」の状態が継続している実態が明らかになった。

(8) 研究成果の社会発信

調査研究の成果は、研究論文 4 本にまとめて学術誌で発表すると同時に、マスワナを編者とする書籍『Développement économique et sécurité en République démocratique du Congo（コンゴの安全保障と経済発展）』（L'Harmattan、2018）を 12 月に出版した。フランス語で出版したことにより、コンゴ人研究者・実務家との議論が一層深まることが期待される。

また、ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞以降は、医師の活動を描いたドキュメンタリー映画『女を修理する男』の上映会や、コンゴの紛争と性暴力に関する講演会、テレビ番組、特集記事などが数多く企画されたため、本問題について解説する機会を得た。米川、華井、大平、村松の 4 名で計 16 回の講演や解説を行ったほか、東洋経済オンラインやニュースウィークなど一般向けのメディア記事 4 本を寄稿した。

2018 年度に全国 62 か所の市民団体や大学などが『女を修理する男』の上映会を開催したことは、本映画の日本語字幕作成と DVD 化を担った ASVCC にとって、大きな成果であった。

(9) 今後の展望

これまでの調査結果によって、鉱物の採掘・輸送を管理する資源ガバナンスおよび、性暴力の加害者を正当に裁く現地のガバナンスに問題がある限り、紛争鉱物取引規制という経済的手段によって紛争経済を転換することは不可能であるという結論に達した。2016 年末以降、コンゴ政府による統治は東部の紛争地域にますますおよばなくなり、医療、教育、司法などの公共サービスが住民に届かなくなっている。こうした現状を踏まえて 2019 年度は、現地のガバナンスに注目した調査研究を実施する。同時に、ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞が、日本における関心の高まりをもたらすのみならず、コンゴにおける性暴力を止めるための具体的な活動が始まるきっかけとなることを切に願い、調査研究および社会啓発活動を続けていく。

1.2 「コンゴの紛争資源問題からとらえるビジネスと人権」シリーズセミナー第 7 回 ノエル・ツァニ氏講演会「紛争影響地域の住民を支える開発援助のあり方」

(1)日時：2018 年 5 月 22 日（月）18:00～20:30

(2)場所：東京大学 本郷キャンパス 国際学術総合研究棟 SMBC アカデミアホール

(3)内容：①主旨説明：華井和代 東京大学 講師 / ASVCC 副代表

②基調講演者：ノエル・ツァニ 世界銀行 カントリー・マネージャー

③コメント：鬼丸昌也 認定 NPO 法人 テラ・ルネッサンス 理事

④質疑応答

(4)企画主旨

資源産出地域にくらす人々を紛争からのみならず飢餓と貧困からも守るためには、紛争鉱物取引規制のみならず、住民の生計手段を保证する多様な援助が必要不可欠である。今回のセミナーでは、コンゴ出身の世界銀行（以下、世銀）カントリー・マネージャーであるノエル・ツァニ氏を招き、コンゴですで行われている援助政策と、今後さらに必要な援助の展望についてお話しいただいた。あわせて、コンゴでの住民支援活動を行っている NGO テラ・ルネッサンスの理事鬼丸昌也氏に活動を紹介いただいた。その上で、世界有数の資源消費国であり援助国でもある日本の役割を、企業、政府機関、国連機関、NGO、メディアの関係者と一緒に議論した。

(5) 開催報告

本セミナーには、研究機関、援助機関、政府機関、企業、メディア、一般市民から計 86 名が参加した。基調講演者のツァニ氏は、世銀とその他の国際機関の、コンゴの紛争資源問題および開発への取り組みを中心に説明した。世銀はコンゴ政府の主要な開発パートナーとして、投資環境整備、インフラ整備、教育、保健、医療、食料の確保など多岐にわたる支援を行っている。今後の効果的な援助のためには、包括的な開発戦略が必要であると述べた。そして、日本はコンゴの開発に対して、技術援助、能力開発や特定プロジェクトへの資金提供、インフラ開発や工業化への参画など、大きな貢献ができるとして、コンゴ政府と日本政府との連携強化を訴えた。

基調講演に対し、テラ・ルネッサンス代表の鬼丸氏は事業説明を交えてコメントを述べた。テラ・ルネッサンスは、すべての生命が安心して生活できる社会の実現を目指し、オーナーシップとオーダーメイドという 2 つの原則のもと、コンゴにおいて技術支援や生計向上支援、教育補助を行っている。技術支援を受けた元子ども兵が武装勢力に対し「俺は溶接技術をつかって鉄柵やドアをつくるのに忙しい」と言ってリクルートを断った例を挙げ、ツァニ氏の講演でも言及された、雇用を整える、働く技術、環境を手渡す包括的な支援の重要性を強調した。閉会に際しては、ツァニ氏、鬼丸氏双方から、コンゴのための国際連帯が再度強調された。

* 詳細議事録はこちら * <http://gsdm.u-tokyo.ac.jp/?p=11842>

(6)開催主体

共同主催：コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC） / 東京大学リーディング大学院プログラム GSDM



1.3 第3回「コンゴの経済発展と安全保障」国際会議 「コンゴ民主共和国の経済と開発における組織の役割」

- (1) 日時：2018年9月29日（土）9:45～17:45
(2) 場所：ベルギー、メルキュール・ブリュッセル・センター・ミディ・ホテル 会議室
(3) 内容：①主旨説明：ジャン＝クロード・マスワナ コンゴ経済人会議 代表 / ASVCC アドバイザー
②研究発表（12件）
③意見交換

(4) 企画主旨

安全保障は、経済および社会が発展するために必要不可欠であり、同時に、経済発展は安全保障のために必要な条件である。長期化する情勢不安は社会を破壊し、住民の移住を余儀なくし、国民の福祉にむしろ悪影響をもたらすような経済活動を助長する。そのため、コンゴが抱える経済問題と安全保障問題を同時に議論することが必要である。こうした問題意識に基づき、コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）は、在外コンゴ人経済学者を中心とする「コンゴ経済人会議（CEC）」との共催による国際会議を開催し、欧米在住のコンゴ人を中心とする研究者と実務家計39名と情報共有および意見交換を行った。

(5) 開催報告

本国際会議には、ヨーロッパ諸国、カナダ、日本から計39名の研究者と実務家が参加した。マスワナは、コンゴ経済人会議の代表として本会議の議長を務めた。

12名の発表者の中で、米川は、「ルワンダ難民の不安定性とコンゴの持続可能な開発への影響」と題する発表を行い、1990年代のルワンダ紛争にともなって発生した難民がいまだに安全を保障されない状態にあることが、コンゴの紛争状況や開発の問題にも影響を与えていることを指摘した。

華井は、「紛争鉱物からコバルトへ：取引規制の拡大」と題する発表を行った。コンゴ東部の紛争鉱物を対象として2010年にOECDとアメリカで導入された紛争鉱物取引規制の効果と分析したうえで、規制がコンゴ南部のコバルト鉱山における児童労働にも拡大している現状を説明した。

最後に、参加者間での意見交換が行われた。2016年から開催されている本会議の成果は、2018年11月にマスワナを編者とするフランス語書籍、*Développement économique et sécurité en République démocratique du Congo*, Editions L'Harmattan, Parisとして出版された。

(6) 開催主体

共同主催：コンゴ経済人会議（CEC） / コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）

後援：三菱財団、高木仁三郎市民科学基金、東京大学政策ビジョン研究センター



1.4 「女を修理する男」上映会と討論会@南山大学

(1) 日時：2018年12月22日(土) 14:00～17:30

(2) 場所：南山大学

(3) 内容：①主旨説明：米川正子 立教大学 特定課題研究員／ASVCC 代表

②映画『女を修理する男』上映

③解説および討論：

石原美奈子 南山大学人文学部人類文化学科 教授

ムンシ・ロジェ・ヴァンジラ 南山大学国際教養学部国際教養学科 教授

米川正子 立教大学特定課題研究員／ASVCC 代表

④質疑応答

⑤閉会あいさつ：関根健次 ユナイテッドピープル 代表

(4) 開催報告

はじめに、米川が開催主旨と邦題の意味を説明し、上映後に映画について解説及び討論が行われた。米川は、本映画で取り上げられている性暴力は単なるレイプではなく、組織的に行われる「性的テロリズム」であると説明した。これらの性暴力は性的欲求によるものだけでなく、経済的政治的な理由から組織的に生じる場合が多い。コンゴでは、性暴力の加害者が罪に問われない「不処罰」が横行しているため、性暴力が続いていると指摘した。さらに米川は、コンゴ紛争の構造的な側面として、紛争と豊富な資源の関係や、ルワンダ政府や国際社会の関与について解説した。また、上映会の一週間前にオスロで開催されたノーベル平和賞授与式を踏まえ、ムクウェゲ医師が本賞を受賞した意義を述べた。

次に、コンゴ出身のヴァンジラ准教授から、「コンゴ人にとってムクウェゲ医師はどのような存在なのか」と題して解説が行われた。ムクウェゲ医師は、素晴らしい技術を持った奇跡の医者であり、被害女性の声の代弁者であり、世界に未だよく知られていないコンゴの「ジェノサイド」を世界に知らしめた人物だとした。ところが、今回のムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞は、コンゴ政府からは歓迎されていないという。

続く会場からの質問に対して米川は、コンゴ紛争の構図が大変複雑であることを繰り返し述べつつ、コンゴ紛争は、その舞台こそコンゴであるが、国外のアクターが介入する国際紛争であり、経済戦争なのだと念を押した。最後に、本映画配給会社ユナイテッドピープルの関根健次代表からあいさつがあった。コンゴ紛争をはじめ、世界には難しい問題が多くある。映画とは世界の教科書であり、ニュースよりも深い学びのきっかけとしてほしいと述べ、会場の参加者に市民上映会の開催を呼び掛けた。

* 詳細議事録はこちら * <http://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/activities/information/014391.html>

(5) 開催主体

主催：南山大学人類学研究所

共催：コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC） / ユナイテッドピープル



1.5 ムクウェゲ医師ノーベル平和賞受賞記念フォーラム「コンゴの課題を考える」

(1) 日時：2019 年 1 月 31 日(金) 18:00～20:00

(2) 場所：文京シビックホール 3 階会議室 1・2

(3) 内容：①主旨説明＆報告 1「ムクウェゲ医師受賞スピーチの概要と天然資源に関わる消費者責任」

華井和代 東京大学 講師 / ASVCC 副代表

②報告 2「2010 年国連報告書（マッピングレポート）コンゴ東部における重大な罪と虐殺」

米川正子 立教大学 特定課題研究員 / ASVCC 代表

③報告 3「コンゴ人から見たノーベル平和賞受賞と 2018 年大統領選挙」

ジャン＝クロード・マスワナ JAB 代表取締役 / ASVCC アドバイザー

④報告 4「オスロでの授賞式・祝賀会の様子」

小島千晶 ASVCC メンバー

⑤質疑応答

(4) 企画主旨：ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞の意義とコンゴの現状について情報共有する。

(5)開催報告

華井は、ASVCC の紹介をしたのち、本フォーラムの主旨、ムクウェゲ医師の受賞スピーチの概要、およびコンゴ東部の現在の紛争状況を説明した。続いて米川が、ムクウェゲ医師が受賞スピーチ内で言及した 2010 年の国連報告書（通称：マッピングレポート）と、コンゴ東部におけるルワンダ軍による虐殺行為について解説した。マッピングレポートとは、1993 年から 2003 年にコンゴで起きた重大な犯罪を 1280 人の目撃者のインタビューをもとに記録した報告書である。コンゴ東部で起きた 600 以上の戦争犯罪や人道に対する罪、さらに集団虐殺に関する報告がなされている重要なレポートであるにもかかわらず、国連総会では具体的な議論がなされることがなく、国際的な場でそれらの罪が全く審議されていないことを米川は指摘した。続いてマスワナより、コンゴ人にとっての本受賞の意義と 2018 年 12 月に行われた大統領選挙の問題点について解説した。ムクウェゲ医師の受賞は、コンゴ人が初めて受賞した国際的な賞であり、コンゴにとっていかに歴史的な出来事であるかを強調した。一方で、政府からの処罰を恐れてコンゴの国営放送ではムクウェゲ医師の受賞に関する報道は一切行われず、コンゴ国内ではムクウェゲ医師の平和賞受賞が祝われることがなかった。さらに、2018 年 12 月 30 日に行われた大統領選挙をめぐる不正と混乱について解説した（※大統領選挙についての詳細は、ジャン＝クロード・マスワナ「コンゴ民主共和国の不正選挙と混乱」岩波書店『世界』2 月号に掲載されている）。最後に、オスロでの授賞イベントに参加した小島が、現地での様子を報告した。本フォーラムははじめての大学キャンパス外での開催で、ASVCC の市民活動としての位置づけを強めたものとなった。フォーラムには 74 名が参加し、コンゴの情勢に対する関心の高まりが感じられる会であった。

* 詳細議事録はこちら *

https://docs.wixstatic.com/ugd/e25891_21ff642bd1c54d8bafac3e6a7d252b9e.pdf

(6) 開催主体

主催：コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）

後援：高木仁三郎市民科学基金

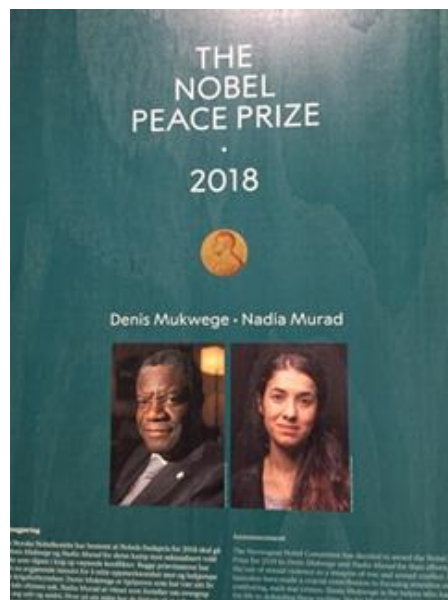


2. ムクウェゲ医師ノーベル平和賞受賞に関する活動報告

2018年10月5日（金）、紛争下の性暴力と闘ってきた2人の人権活動家にノーベル平和賞が贈られることが発表された。イラク北部出身のヤジディ教徒ナディア・ムラド氏と、コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）が2016年から支援してきたコンゴ人婦人科医のムクウェゲ医師である。

ムクウェゲ医師の受賞は、世界各地の紛争地域で性暴力の被害に遭ってきた大勢のサバイバーとその支援者を勇気づけただけでなく、コンゴにとって、歴史的な大変重要な出来事であった。今回の受賞は、コンゴ人が初めて受賞した国際的な賞であり、中央アフリカ12カ国においてノーベル平和賞を受賞した初めての例でもある。ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞は、1996～97年に起きたコンゴでの「虐殺」が深刻な問題であると国際的に認められたという意味も持っている。

しかし、受賞が状況を一変させるわけではない。コンゴの国営放送はこの出来事を完全に無視し、受賞の報道はなされなかった。そのため、コンゴに住む多くの人はSNSでこのニュースを知ったという。国際的な盛り上がりを一時的な高揚にとどめないために、継続した活動が重要となる。



ASVCCは、ノーベル平和賞の発表後、日本の市民が本問題について理解を深めるために以下の活動を行った。

2.1 2018年10月6日（土） 東京大学本郷キャンパス

ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞に関する記者会見

2.2 2018年10月7日（日）

ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞への公式コメント発表

2.3 2018年12月10日（月）

ノーベル平和賞授賞式＆関連イベントへの参加

2.1 ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞に関する記者会見

(1) 日時：2018 年 10 月 6 日（土）

(2) 場所：東京大学 本郷キャンパス 伊藤国際学術センター

(3) 内容：①主旨説明：華井和代 東京大学 講師 / ASVCC 副代表

②コメント：米川正子 立教大学 特定課題研究員 / ASVCC 代表

③コメント：ジャン＝クロード・マスワナ Japan Africa Business 代表取締役 / ASVCC アドバイザ

ー

④質疑応答

(4)開催報告

はじめに華井より、ASVCC の紹介と記者会見の主旨を説明した。また、ムクウェゲ医師からの「日本で応援してくれる方々にコンゴ人を代表して感謝を伝えたい」というコメントを伝えた。

次に、米川が自身の経歴から ASVCC 設立に至った経緯を説明した上で、今回の受賞の意義として、以下の 3 点を挙げた。第 1 に、「戦争の武器として性暴力が使用されている」という事実が周知されることである。ムクウェゲ医師が性暴力を「性的テロリズム」と表現しているように、性暴力はコミュニティや家族を壊してしまう強力な武器となっている。紛争下では、レイプは体一つで多くの人をおびやかせる、安上がりな武器として使用されている。武器を購入する必要もなく、家族やコミュニティに精神的な痛みをあたえられるからである。また、コンゴ国軍や反政府軍が、紛争鉱物資源の占有に邪魔な存在である現地住民を迫りやるため、性暴力で恐怖を植え付けている。残虐な問題への認知が広まることで、受賞のひとつの大きな意義である。第 2 に、この問題が、「コンゴだけでなく、グローバル社会全体の問題である」と認知されることである。紛争下の性暴力の問題は、コンゴだけでなく、ユーゴスラビアにおける暴力や慰安婦問題も含まれる。第 3 に、ムクウェゲ医師がリスクをかかえながら活動していること、政治的圧力もある状況を知ってもらうことである。コンゴ政府も間接的に関与し、コンゴ国軍も性暴力を働いている。そのため、医師は政府から敵視され、命を狙われている中で活動している。多くのアドボカシー活動がなされているにもかかわらず、一向に解決されないのは、このように課題が極めて政治的であるからだ。ムクウェゲ医師も、政治的な解決策を求めている。

続いて、コンゴ出身のマスワナが、この受賞がムクウェゲ医師だけのものではなく、コンゴ人全員にとって意味を持つこと、コンゴ人全員とこの勝利を共有する必要があることを述べた。さらに、重要な点として 2 点を挙げた。まず、コンゴ人にとっては、初めてのノーベル賞受賞という歴史的な意味を持つこと。2 点目に、この受賞によって、性暴力の問題が世界中に認知されるということ。そして最後に、性暴力という問題に取り組む多くの人々の高潔さを証明したことである。世界とコンゴ国内との間ではこの課題への反応に大差が見られる。世界では、性暴力という問題に対して関心を高めるポジティブな動きが高まっている一方で、コンゴ国内ではムクウェゲ医師の活動に懐疑的な目を向ける人がいる。この問題をもっと公にしていけることが求められており、受賞は性暴力問題の終わりではない。この問題について、全世界で考え始めねばならない。

最後に華井が、コンゴの紛争資源問題の現状について説明を加えた。コンゴ東部にはタンタルが豊富にあり、紛争資金に使われてきた。現在状況はますます複雑になっており、NGO の報告書によれば、コンゴ東部の鉱山の 6 割からは紛争主体が撤退したと報告されているのに、紛争状況は改善していない。死者数が減らない理由としては、武装勢力が金の鉱山に移動していることや、道路での「徴税」行動を行っていることが挙げられる。また、武装勢力が分派して数が増加し、むしろ活動が広がっている。2010 年に紛争鉱物取引規制ができたことによって、大規模な活動がしにくくなっているために、武装勢力が動きやすい規模まで細分化したという経緯がある。企業が紛争鉱物の使用をや

めても、状況が改善しない背景には、このような問題がある。しかし、残念ながら日本ではこうした問題は議論されていない。2016 年にムクウェゲ医師が初来日して初めて広がりを見せたが、大きな動きにはまだなっていない。規制後の治安状況に鑑みると、紛争鉱物がスマホに使用されているというアピールの段階は、もう終わっている。関心が高まった、というだけの状態で終わってほしくはない。サプライチェーンの上流である資源採掘地域の人とつながることが大切だと考えている。

主な質疑と回答は以下の通りであった。

質問：今後について、ムクウェゲ医師との活動は予定されているか

回答：2 回目の招聘を目指している。また、パンジ病院のために募金活動を予定している。若手研究者育成も今後していかななくてはならない。コンゴに関するセミナーの開催や、映画上映キャンペーンも予定している

質問：問題は次の段階に進んでいるとは、どういうことか

回答：問題が紛争鉱物問題の範疇に収まらなくなっているということ。紛争鉱物取引規制は 2014 年から適用されているものの、2017 年までに調査を終了している企業は 53%にとどまっている。コンゴボイコットも起きて、コンゴから鉱物を買わない動きが起きている。しかし、武装勢力の現地住民からの略奪行為やコミュニティ破壊が発生しており、2015 年には大規模な虐殺事件も起きている。大統領選挙がまだ行われていないことによる暴力事件も起きているため、もはや紛争鉱物の範疇に問題が限られなくなっている。

質問：今回の受賞に際して、ムクウェゲ医師にメッセージを送ったり、連絡をとったりしているか

回答：ムクウェゲ氏の妻には昨日メッセージを送った。本人にも今日改めて祝福の言葉を送る。彼は性暴力の問題だけではなくて、例えば貧しい母親たちのために、無料の給食が出る学校を建てたり、いろいろな活動をしている。

質問：具体的な政治的解決の内容とは

回答：対処療法的に人々を治療するだけでなく、政府が動かなければ根本の解決にはならないとムクウェゲ医師は訴えている。また、兵士の不処罰の問題がある。自分の家族を殺した人が警察官として戻ってくる、そんな地域で育った子どもが倫理観を正しく持てるだろうか。法の統治の実現も考えなければならない。



2.2 ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞への公式コメント発表

2018 年 10 月 7 日、コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）は、ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞に寄せて、コンゴの紛争問題の啓発に関わってきた立場から以下の公式コメントを発表した。

コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC、2016 年設立）は、コンゴ民主共和国(以下、コンゴ)の婦人科医・人権活動家のデニ・ムクウェゲ医師が 2018 年のノーベル平和賞を受賞されたことに、心より喜び申し上げます。

ASVCC は、コンゴにおける紛争と性暴力および住民への人権侵害に関する研究に加えて、ムクウェゲ医師の活動を描いたドキュメンタリー映画「The Man who Mends Women」（2015 年、ベルギー制作、邦題『女を修理する男』）に日本語字幕を付けて 2016 年度に日本全国で上映キャンペーンを行いました（2018 年 3 月に United People より日本語字幕付き DVD として発売しております）。2016 年 10 月には東京大学および笹川平和財団との協力により、ムクウェゲ医師の来日講演会を実現しました。その後、年に数回のセミナー開催を通じて日本のみなさまに支援の輪が広がっていることを実感しています。

コンゴにおける紛争下の性暴力は、コンゴだけの問題ではありません。コンゴ東部で産出される鉱物資源が電子機器の原料となって日本を含む世界各地の人々の生活に便利さをもたらす一方で、産出地域においては住民に対する人権侵害の原因となり、性暴力が「紛争の武器」として使われています。コンゴにおける性暴力を止める責任は、日本の政府・企業・一般市民にもあると私たちは認識しています。さらに、コンゴに限らず世界で起きている紛争下の性暴力は、人間の尊厳に関わり人類共通の問題です。

ASVCC は、今回のノーベル平和賞が、日本における関心の高まりをもたらすのみならず、コンゴにおける性暴力を止めるための具体的な活動が始まるきっかけとなることを切に願い、研究・啓発活動を続けていきます。

コンゴの性暴力と紛争を考える会

代表 米川正子

副代表 華井和代

ジャン＝クロード・マスワナ（ASVCC アドバイザー）のコメント

ムクウェゲ医師に授与されたノーベル平和賞は、たとえ、性暴力を含めたあらゆる暴力による苦しみはコンゴに長い夜をもたらしているとしても、この地平線の先には明るい光があることを示唆しております。

医師は以下のように述べておられます。

「我々の闘いが認識されている今、我々は補償を求めています」

医師によれば、自身の闘いを認識するだけでは不十分であり、より重要なのは、性暴力の被害者に対する補償です。ムクウェゲ医師は、暴力の被害者たちに未来を取り戻させる手助けとして、彼らの基本的なニーズに応えることにすべての人が関わることを求めています。ムクウェゲ医師と、このノーベル平和賞に献身的な努力をしたすべての人々を祝福しながら、私たちの世界をより人間的なものにするために、彼と手を取り合ひましょう。

ムクウェゲ医師は、偉大なる人類を構成するすべてのもの、すなわち安全保障、自由、尊厳を守ってきました。医師は性的暴力の被害者を癒しながら、人間性を破壊するすべてのものを糾弾しています。彼は被害者を癒すために、コンゴ人だけでなく、より明るい人類の出現のために絶えず取り組んできました。医師は自身の活動において、日本の人々の支持を獲得しました。今回の認識は、共通の価値観と共通の運命によって得たものだともみなされるべきです。今年のノーベル平和賞が授与されたことを知った後で、改めてムクウェゲ医師の上記の言葉を振り返る必要があります。

2.3 ノーベル平和賞授賞式&関連イベントへの参加

(1) 日時：2018 年 12 月 10 日（月）

(2) 場所：オスロ（ノルウェー）

(3) 内容：①ノーベル平和賞授賞式（オスロ市庁舎）

②公式晩餐会（グランドホテル）

③市民や支援者によるたいまつ行進&バルコニーからの受賞者あいさつ

④オスロ議会センターでの在外コンゴ人主催祝賀会

(4) 参加報告

①ノーベル平和賞授賞式：オスロ市庁舎

授賞式には ASVCC アドバイザーのマスワナが列席し、米川、華井、小島を含む日本からの支援者は中継会場のノーベル平和センターで多くの支援者と一緒に様子を見守った。授賞者特別講演としてムクウェゲ医師が力強いスピーチを行うと、授賞式会場のみならず、中継会場で観ていた多くのコンゴ人も、国旗を振って喜びを表現した。ムクウェゲ医師は受賞スピーチにおいて、パンジ病院での実体験に基づいて性暴力の実態を語り、紛争鉱物問題と国の指導者・権力者の腐敗、紛争の実態を調査した「国連マッピングレポート」が放置されていることを指摘し、正義の実現に向けた「私たち」の責任を問いかけた。📎付録：ムクウェゲ医師によるノーベル平和賞受賞スピーチ全文



②公式晩餐会：グランドホテル

ノルウェー王室、政府高官に加えて、長年ムクウェゲ医師を支えてきた NGO の代表、市民代表、そして受賞者の招待客が列席して開催された。ASVCC からはマスワナが列席し、関係者との情報共有や意見交換を行った。

③たいまつ行進&バルコニーでのあいさつ：グランドホテル前

公式晩餐会が開催されている夕刻、グランドホテル前の広場では受賞者を称えるたいまつ行進が行われた。世界各地から集まった支援者がナディア・ムラド氏とムクウェゲ医師の名を呼び、「We want peace！」と繰り返す姿が印象的であった。19 時にはムラド氏とムクウェゲ医師がバルコニーに姿を現し、支援者に手を振ってあいさつをした。



④在外コンゴ人主催の祝賀会：オスロ議会センター

ムクウェゲ医師の支援者が主催した夜の祝賀会には、在外コンゴ人を中心に大勢の支援者が集まり、有名な司会者やミュージシャンのパフォーマンスなどで大いに盛り上がった。同時に、何度もレイプ被害に遭い、ムクウェゲ医師に保護された少女が壇上で証言を行い、コンゴで起きている悲劇の実態を参加者に伝えた。マスワナ、米川、華井、小島をはじめとする日本の支援者も出席し、ムクウェゲ医師の活動を描いたドキュメンタリー映画『女を修理する男』の原作者や監督とも会うことができた。

警備上の事情でムクウェゲ医師が晩餐会に出席できたのはわずか 15 分ほどであったが、祝賀会に集まった 800 名の支援者に向けて医師は、「コンゴ国外に在住するあなた方は、情報にアクセスし、自由な発言ができる。ここにいる全員が責任を持って行動すれば、状況は変えられるはず。責任を果たしてほしい」と強調した。ムクウェゲ医師の力強いメッセージは、祝賀ムードの会場の雰囲気を一気に引き締めた。



平和賞授賞式への列席を終え、マスワナはその心情を以下のように語った。

「これらすべての経験は、わたしたちコンゴ人だけに特別で唯一のものではないが、最も過酷な状況にある活動家の一人であるムクウェゲ医師が、このように認識されたことで、コンゴの悲劇を知らせる闘いにおいて、画期的な出来事が達成されたという気持ちがある。加えて、私がオスロで交流しコンゴ人からは、ムクウェゲ医師がノーベル賞受賞を活かし、コンゴでのリーダーシップを発揮することへの、とても高い期待を感じた」。

マスワナは、コンゴ人として授賞式と晩餐会に列席し、複雑な感情を抱えていたという。受賞は大変喜ばしい出来事であり、コンゴ人にとって自国を誇りに思う稀な機会となった。一方で、ムクウェゲ医師の受賞スピーチや祝賀会での少女の証言は、コンゴ東部で未だ続く暴虐を、多くのコンゴ人に思い起こさせた。



ノーベル平和賞受賞スピーチや祝賀会でのムクウェゲ医師のメッセージは、コンゴが抱える問題の本質を突き、コンゴ国内外の各人が責任を果たすことを訴えかけるものであった。日本の支援団体として ASVCC は、医師のメッセージを真摯に受け止め、コンゴの平和を実現するために責任を果たしたいとの思いを強めた。

3. 招待講演／映画上映会／DVD 発売

ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞を機に、映画『女を修理する男』の上映会や、コンゴ問題に関する講演会が日本各地で企画され、ASVCC への講演依頼等が寄せられた。

3.1 招待講演

ASVCC メンバーが登壇し、コンゴの実態や歴史的背景、ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞の意義等について解説を行ったイベントは以下の 11 件である。

(1) JICA 地球ひろば主催 『女を修理する男』上映会&講演会

【日時】2018 年 11 月 15 日(木) 18:30～21:00

【会場】JICA 市ヶ谷ビル 2 階 国際会議場

【講師】米川 正子

【参加者数】74 名



(2) #プロジェクトぴ〜す 研究会

【日時】2018 年 11 月 16 日(金) 19:00～21:00

【会場】JICA 市ヶ谷ビル 2 階 202 会議室

【講師】華井和代

【参加者数】12 名

(3) 開発教育協会（DEAR）&ASVCC 主催『女を修理する男』上映会+トーク

【日時】2018 年 11 月 27 日(火) 18:30～21:00

【会場】聖心グローバルプラザ 3F ブリット記念ホール

【トークゲスト】大平和希子、華井和代

【参加者数】231 名

【協力】聖心女子大学グローバル共生研究所



(4) Action for Future Toyama 主催 『女を修理する男』上映会&トーク

【日時】2018 年 12 月 16 日(土) 10:00～13:00、14:00～17:00

【会場】城東音楽院ホール

【トークゲスト】大平和希子

【参加者数】80 名

(5) 市川房枝記念会 女性と政治センター主催 『女を修理する男』上映会&トーク

【日時】2018 年 12 月 18 日(火) 13:00～16:30

【会場】女性展望カフェ

【講師】米川正子：テーマ「コンゴ東部における性テロと紛争の実態」

【参加者数】約 54 名

(6) 桜美林大学 LA 学群国際協力・国際関係・文化人類学専攻ゼミ主催

2018 年ノーベル平和賞受賞記念・映画上映会『女を修理する男』

【日時】2018 年 12 月 19 日（水）12:50 ～16 : 00

【会場】桜美林大学

【講師】大平和希子

【参加者数】約 50 名

(7) JICA 中部主催 2018 年ノーベル平和賞受賞デニ・ムクウェゲ医師のドキュメンタリー『女を修理する男』映画とパネルトーク

【日時】2018 年 12 月 23 日（日）時間

【会場】JICA なごや地球ひろば

【講師】村松智妃呂

【参加者数】58 名

https://www.jica.go.jp/chubu/topics/2018/20190110_01.html

(8) ピースボート主催 講演会「世界最悪の紛争・コンゴと『性的テロリズム』の実態

【日時】2019 年 1 月 16 日（水）19 : 00～20 : 30

【会場】ピースボートセンターとうきょう

【講師】米川 正子

【参加者数】16 名

(9) 明治学院大学教養教育センター研究会

【日時】2019 年 1 月 30 日 17:00～19:00

【会場】明治学院大学

【講師】華井和代

【参加者数】5 名

(10) ニコニコ動画 戦争と性暴力特集 『女を修理する男』ネット上映会&解説

【日時】2019 年 2 月 1 日（金）20:00～23:00

【出演者】土井香苗（国際人権 NGO ヒューマン・ライツ・ウォッチ日本代表）、米川正子

【来場者数】9587 名

【コメント数】2745

<https://live.nicovideo.jp/gate/lv318015783>

(11) 大阪大学キャンパスハラスメント講習会「コンゴ東部における性的テロと日本の人権意識」

【日時】2019 年 2 月 14 日（木）10:30～12:00

【会場】大阪大学

【講師】米川正子

【参加者数】30 名

3.2 映画上映会

全国各地で『女を修理する男』上映会が開催され、下記 69 回の上映で、計 12,581 名が鑑賞した（web 上映会での鑑賞者 9587 名）。

5/18 conte lunair（長野県）	11/30 広島市立大学（広島県）
5/18 下北沢かまいキッチン（東京都）	12/3 広島大学中央図書館（広島県）
5/22 キャスレーコンサルティング株式会社（東京都）	12/5 つくばイノベーションプラザ（千葉県）
5/24 つくば自立生活センターほにゃら（茨城県）	12/7 JICA 地球ひろば（東京都）
5/26 府中市女性センター（東京都）	12/7 PETHICA（東京都）
5/29 コモンビートオフィス（東京都）	12/9 Social Book Cafe ハチドリ舎（広島県）
6/4 conte lunair（長野県）	12/10 神戸市外国語大学（兵庫県）
6/16 シスコ 東京ミッドタウン・タワー（東京都）	12/12 宇都宮大学（栃木県）
9/10 建部町公民館（岡山県）	12/15 北九州市 ココクル平野（福岡県）
10/3 つなぐみらい まつだらボ（神奈川県）	12/15 Creation space enjuku（埼玉県）
10/15 ならまほろばトライブ（奈良県）	12/16 城東音楽院ホール（富山県）
10/20 カフェ TRAYCLE Market（千葉県）	12/18 婦選会館（東京都）
10/26 西日本新聞 TNC 文化サークル: アイ&カル チャ西日本（福岡県）	12/19 桜美林大学（東京都）
10/27 シナリー化粧品店舗（群馬県）	12/20 東京外国語大学（東京都）
10/27 カフェトラベッサ（東京都）	12/21 イタリアンレストラン Villa della Pace（石 川県）
11/4 西日本新聞 TNC 文化サークル: アイ&カル チャ西日本（福岡県）	12/22 立教大学（東京都）
11/4 豊中市立環境交流センター（大阪府）	12/23 JICA なごや地球ひろば（愛知県）
11/9 円◎結 / marumusubi（岡山県）	1/13 風屋（岐阜県）
11/10 上尾市市民活動支援センター（埼玉県）	1/16 ピースポートセンターとうきょう（東京都）
11/10 東京ウィメンズプラザ（東京都）	1/17 Social Book Cafe ハチドリ舎（広島県）
11/11 大垣市多目的交流イベントハウス（岐阜 県）	1/19 札幌教育文化会館（北海道）
11/13 ユニコムプラザさがみはら（神奈川県）	1/19 早稲田奉仕園（東京都）
11/13 Sinka オフィス（福岡県）	1/20 yahiro8（東京都）
11/14 ピースポートセンターとうきょう（東京都）	1/26 丸山酒場（東京都）
11/15 JICA 地球ひろば（東京都）	1/27 室蘭市生涯学習センターきらん（北海道）
11/18 フェアトレードショップ コブル（栃木県）	2/1 ニコニコ動画配信（全国）
11/20 BLUE MILE・教法寺（長崎県）	2/7 葉樹株式会社青山オフィス（東京都）
11/23 食堂 そらいろのたね（愛媛県）	2/9 富山大学五福キャンパス（富山県）
11/23 カフェ エスパーロ能勢（大阪府）	2/15 Social Book Cafe ハチドリ舎（広島県）
11/25 UN Women 日本事務所（東京都）	2/15 JICA 沖縄国際センター（沖縄県）
11/26 二子玉川ライズ・オフィス（東京都）	3/4 建部町公民館（岡山県）
11/27 聖心女子大学（東京都）	3/8 文京シビックセンター（東京都）
11/28 シサム工房 店舗（京都府）	3/16 那覇市教育福祉館（沖縄県）
	3/19 日宝サンライズタウンズビル（大阪府）
	3/28 本や+α（岐阜県）
	3/30 北九州市立男女共同参画センター（福岡県）

3.3 『女を修理する男』日本語字幕付き DVD 販売数

69 の教育機関が、『女を修理する男』日本語字幕付き DVD（教育機関用）を映画配給会社ユナイテッドピープルより購入した（敬称略、受注日順に掲載）。

甲南女子大学文学部	福岡女学院大学図書館	近畿大学中央図書館
北海道医療大学	明治大学情報メディア部	市立札幌清田高等学校図書室
北海学園	明治大学和泉メディア	神戸松蔭女子学院台
実践女子大学図書館	立命館大学図書館	立教大学新座図書館
広島修道大学図書館	九州大学工学部	一関市立大東図書館
北九州市立大学図書館	富山県民共生センター	愛知淑徳大学図書館
弘前大学	明治学院大学	東洋大学
京都女子大学	恵泉女学園中学高等学校	文京区立小石川図書館
関西学院大学	北海道教育大学函館校	成城大学図書館
専修大学図書館	長崎県立大学佐世保校	滋賀県立大学図書情報センター
専修大学	世田谷区立男女共同参画センター らぶらすライブラリー	兵庫県立男女共同参画センター図書室
東京外国語大学	大阪女学院大学 LS センター	立正大学
獨協大学	中央大学	こうち男女共同参画センター図書室
関西看護医療大学	東京外国語大学	同志社大学政策学部
東京農業大学	学習院大学法経図書センター	東京造形大学図書館
学習院女子大学	大阪大学 CO デザインセンター	独立行政法人国際協力機構
東京外国語大学	名古屋大学男女共同参画センター	沖縄国際センター
東京農業大学図書館	名古屋工業大学附属図書館	城西国際大学水田記念図書館
日本大学三軒茶屋キャンパス	港区立男女平等参画センター	日本体育大学図書館
お茶の水女子大学	成蹊大学（2 枚）	人間環境大学
青山学院高等部図書館	名城学院大学	筑波学院大学附属図書館
日本赤十字豊田看護大学	九州呉学園	
札幌市立大学	多摩大学グローバル・スタディー	
大阪大学大学院	ズ学部ライブラリー	
同志社女子大学図書館		
桜美林大学図書館		

DVD の販売数は、以下の通りであった。教育機関用、個人鑑賞用ともに、ムクウエガ医師の平和賞受賞が決定した 10 月以降、販売数が大幅に増加した。

【教育機関用 DVD】

総売上枚数：71 枚

2018 年 4～9 月：6 枚

2018 年 10 月：15 枚

2018 年 11 月～：50 枚

【個人鑑賞用 DVD】

総売上枚数：309 枚

2018 年 4～9 月：37 枚

2018 年 10 月：125 枚

2018 年 11 月～：147 枚

4. ASVCC Youth

コンゴの性暴力と紛争を考える会（ASVCC）ユースは、コンゴの性暴力とそれに関わる諸問題に関心のある、大学生を中心とした若手メンバーが結成した団体である。発足のきっかけは、2018 年 10 月、デニ・ムクウェゲ医師がノーベル平和賞を受賞したことである。

2016 年の研究・運営に深く関与した後、すでに大学を卒業していた ASVCC メンバーが、ノーベル平和賞の発表を機に活動再開を計画した。そこへ 2017 年以降のメンバーが加わり、現役大学生を含めたユースとしての活動を開始した。現在、立教大学生 3 名、中央大学生 1 名、社会人 5 名が中心的に活動している。日本国内で関心の低かった本問題に対して注目の集まっている今、専門家ではない私たちが問題を発信していくからこそ、市民の共感を得ることができ、市民活動を活発化させることができると考えている。

したがって、活動理念は「市民の日常生活に根ざしたコンゴの問題意識を発信し、問題解決に向けた市民活動の一步を踏み出す機会を作ること」である。イベントや団体活動に市民が積極的に参加するだけでなく、自分たちとの繋がりを明確に意識し、解決に向けた活動が意義あるものになっていると実感できる状態を目指す。最終目的は、コンゴで生きる全ての人の人権が実感できる形で保障され、誰もが幸せに生きている状態を実現することである。

4.1 ASVCC Youth 活動報告

ASVCC ユースが 2018 年 10 月に発足後、2018 年度に行った活動は以下の通り。

(1) 2018 年 11 月～ 定例勉強会開催

【目的】コンゴに対するメンバーの理解の統一・向上

【開催日】11 月 5 日、19 日、12 月 15 日

【取り扱ったテーマ】コンゴにおける性暴力、コンゴの歴史・政治・経済、ムクウェゲ医師の活動、紛争鉱物

(2) 2018 年 12 月 22 日 立教大学にて映画『女を修理する男』上映会・講演会開催

【目的】コンゴの問題の未関心層に最初のきっかけとなる機会を提供し、その上で、自分ならではの本問題との繋がりを見つけ、明日からできることに会おう。

☞開催概要は、4.2 参照



4.2 ASVCC ユース共催映画『女を修理する男』上映会&講演会

(1) 日時：2018 年 12 月 22 日（土）14:00～17:30

(2) 場所：立教大学

(3) 内容：①『女を修理する男』上映

②学生発表：喜屋武水樹 立教大学学生 / ASVCC ユース

田中瑤花 立教大学学生 / ASVCC ユース

③トークセッション：立山芽以子 TBS NEWS 23 ディレクター

華井和代 東京大学講師 / ASVCC 副代表

※モデレーター：勝田翔一郎 / ASVCC ユース

(4) 企画主旨

世界有数の資源産出国コンゴ東部では、武装勢力や国軍による鉱物の違法採掘・取引が、紛争を長期化させ、多大な犠牲者を生んできた。本上映会&講演会では、このようなコンゴの問題およびムクウェゲ医師の活動をより多くの人々に知ってもらうことを目的とした。

(5)開催報告

本上映会には、研究機関、援助機関、政府機関、企業、メディア、一般市民から計 30 名が参加した。映画上映後のトークセッションでは、喜屋武と田中が、華井と立山氏に話をうかがった。

始めに、華井がコンゴの現在の状況を解説した。コンゴで 20 年以上にわたり紛争が長期化している理由は、構造を変えられないことにある。紛争を支える経済・政治、いわゆる「紛争経済」ができており、政府も紛争を支えている。ムクウェゲ医師は、明確に政府を批判し、住民に配慮した政治を訴えている。しかし、間近に控えた大統領選挙も、延期が続くなど不透明な状況にある。現大統領のカビラ氏は、側近のシャダリ氏を候補に立て、次期選挙で自身の再選をねらっているとも言われている。深刻な性暴力や紛争鉱物問題に対し、国際社会も対応している。国連は PKO の MONUSCO を派遣し、国連紛争下の性暴力事務総長特別代表というポジションも設けた。国連は、性暴力被害者が加害者を訴えるというプロセスを重視している。性暴力にはコンゴ国軍も関わっており、その数は 3 分の 1 に上る。国連はこの問題に対処するアクションプランを作成するようコンゴ政府に求めている。

続いて、2018 年 11 月にコンゴ東部を訪問し、ムクウェゲ医師・性暴力被害者・元加害兵士・鉱山労働者などに取材した TBS NEWS 23 ディレクターの立山氏に取材当時の状況をお話いただいた。現地では警察が機能しておらず、不処罰の問題が深刻である。取材では、元武装勢力の兵士にインタビューをした。殺害やレイプの罪で懲役 5 年を課された彼は、家族がお金を払い 4 か月で出所した。それについて当然のように話していた。しかし彼自身も、武装勢力に加わるか、殺されるかの二者択一を迫られての暴力への加担であったといい、お酒や薬の力を借りてレイプしたという。彼は学校に戻りたいと考えており、レイプした彼もまた被害者であるといえる。

現在でも、毎日被害者が病院に運ばれ、女性が被害に遭う状況が続いている。映画にインタビューされた「9 回目の手術を今日受ける」といった彼女はすっかり体も良くなった。今一生懸命勉強し、将来は看護師になりたいと言っていた。しかし、被害者の中には父親に家を追い出され、寮で暮らしている人もいる。紛争被害者という言葉で、一概にはくれない、様々な人生がある。

最後に、市民として一人ひとりができることについて意見を交わした。立山氏は、多くの人に知ってもらうことを挙げた。番組制作を始めたのも、認知を広めるためであった。TV 番組が、考えるきっかけになればという気持ちを持っている。SNS で情報発信をすることもできる。一人ひとりが考えることが重要である。ノーベル平和賞を受賞したナディア氏は、著書の中で「IS が残虐行為を行っているのは多くの人が知っているが、それよりも残虐行為を見て見ぬふりをしている

ことの方が残虐である」と述べている。私たちの身の回りにも見て見ぬふりをしていることは多い。様々な問題があるが、問題意識を持って自身にできることを常に考え続けることが、世の中を変えていくと思っている。

華井は、コンゴの紛争問題に対する日本国内の認知度の低さに言及し、有権者の責任について述べた。2010年にアメリカで制定されたドッド・フランク法をうけ、関連する日本国内の企業はサプライチェーンの調査を行っている。しかし、その調査の意義が十分に理解され、実施されているとは言い難い状況である。日本国内でコンゴに関する情報も少ない。ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞以前は、コンゴに関する記事も少なかったが、今回の受賞が一つの大きな潮流になっていくことを期待する。立山氏は、知りたい人が多いからメディアは記事を作り、それによって知る人が増え、さらにメディアは記事を作るという好循環が生まれて欲しいと述べた。本問題について、日本政府がどう振舞うべきかを考えて欲しい。間接民主制の日本において、政府を動かすのは我々有権者である。

(6) 上映会を終えて（コースメンバーの感想）

今回の映画上映会を通し、2点の学びが得られた。1点目は、性暴力をするよう指示した者に対する不処罰がはびこっていることだ。性暴力を犯しても、お金を払えば釈放される上に、レイプをした側も殺されるかレイプをするかの選択を迫られていること。このことから、警察や法が機能していない状態と言える。2点目は、問題に対し見て見ぬふりをすることが性暴力の被害者を苦しめているということである。何が起きているのか把握しているにもかかわらず、問題から目をそらすことは、社会をますます不寛容にさせているように感じた。今後の展望として、コンゴの性暴力と紛争問題をさらに多くの人々に知らせる必要があると考えている。2018年のノーベル平和賞受賞によるメディアや世間からの注目を一過性のものとせず、現在も続いている問題として捉える必要がある。それが、社会問題に対し見て見ぬ振りすることを防ぎ、社会が寛容になることの一步に繋がるのではないか。

(4) 開催主体

主催：科学研究費基盤(C)「ジェンダーと国際政治—戦争・民主化・人権のダイナミクス」（研究代表者：立教大学法学部 竹中千春）



4.3 Youth メンバーの声

私は2018年、ユースのメンバーとして勉強会に参加したり、上映会の運営に携わりました。コンゴの紛争や性暴力について知り、こんなに酷い、残虐なことが行われ、同じ人間が苦しんでいるのか驚くと共に、何も知らなかったために力になることができず、とても悔しかったです。コンゴは日本ではあまり報道されないため、コンゴのそうした状況について知っている人は多くありません。私の家族や友人に、コンゴについて勉強していると話しても、なぜコンゴ？コンゴに何があるの？と言われることもしばしばです。同じ地球上であれだけ多くの人が苦しんでいるのに、誰もコンゴに関心がないことは大変悲しくなります。しかし、ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞や、紛争鉱物の問題により日本のみならず世界各国でコンゴという国が注目されている今、学生として少しでも、コンゴで助けを必要としている人々の力になりたい、多くの人々にコンゴについて知ってほしいという思いで日々、活動しております。 中央大学学生 清水元

5. メディア掲載

2018 年度はノーベル賞受賞の盛り上がりもあり、メディア露出の多い年であった。

5.1 新聞記事

ASVCC の活動やメンバーのコメントが掲載された新聞記事は紙媒体で 14 点、オンラインで 10 点に上った。

【新聞記事】

掲載日	見出し	新聞社	掲載者
2018/10/6	ミニ論点 UNHCR ゴマ（コンゴ民主）元事務所長・米川正子氏	毎日新聞	米川正子
2018/10/7	実態見過ごさないで コンゴの性暴力考える会	共同通信（埼玉新聞 他掲載）	華井和代
2018/10/7	平和賞 女性の苦しみに光	朝日新聞	米川正子
2018/10/7	性暴力根絶 何ができるか考えて	朝日新聞	米川正子
2018/10/7	性暴力「解決策が必要」	東京新聞	米川正子
2018/10/13	ムクウェゲさん映画 県内で上映会を	北陸中日新聞	大平和希子
2018/10/7 ～10/20	性暴力は支配の「武器」	共同通信（京都、高知、埼玉、信濃毎日、神戸、西日本、中国、徳島、福井、北海道新聞掲載）	米川正子
2018/11/11	性暴力根絶へ 女性に寄り添う	朝日学生新聞	米川正子
2018/11/30	性暴力と闘う 世界に目を	北陸中日新聞	大平和希子
2018/12/3	性暴力と闘う 世界に目を ノーベル平和賞 ムクウェゲ医師映画 16 日高岡で上映決定	北陸中日新聞 富山版朝刊、石川版夕刊	大平和希子
2018/12/3	性暴力考える上映会	東京新聞	大平和希子 華井和代
2018/12/4	考えたい紛争下の性暴力	朝日新聞 福岡版夕刊	米川正子
2018/12/9	危険顧みず「人間益」追求	神戸新聞	米川正子
2018/12/17	性暴力と闘う 伝わる勇気	北陸中日新聞	大平和希子
2019/1/1	コンゴの大量虐殺、「慰安婦」問題にも目を	Femine	米川正子
2019/1/27	なぜを問い、何をすべきか考えて	カトリック新聞	大平和希子 華井和代
2019/03/07	コンゴの性暴力は他人事ではないと訴える 米川正子さん	共同通信（山陰中央、岐阜、宮崎日日、日本海、北園、秋田さきがけ、京都、神戸、沖縄タイムス、大分合同新聞掲載）	米川正子

【オンライン新聞記事】

掲載日	見出し	新聞社	掲載者
2018/10/5	性暴力と戦う 2 人に平和賞 国内からもたたえる声	日本経済新聞	米川正子
2018/10/6	ミニ論点 UNHCR ゴマ（コンゴ民主）元事務所長・米川正子氏	毎日新聞	米川正子
2018/10/6	性暴力問題「解決策が必要」 ムクウェゲさん講演、共催団体	京都新聞	米川正子
2018/10/6	性暴力問題「解決策が必要」 ムクウェゲさん講演、共催団体	福井新聞 ONLINE	米川正子
2018/10/7	性暴力「解決策が必要」 ムクウェゲさん講演、共催団体	東京新聞 TOKYO Web	米川正子
2018/12/9	命かけて「人間益」追求 ノーベル平和賞医師の素顔は	神戸新聞 NEXT	米川正子
2019/02/10	被害者の苦悩を「他人事」と思わないで 映画『女を修理する男』から考える性暴力	Yahoo!ニュース	大平和希子

5.2 執筆記事

ASVCC メンバーが執筆した記事は以下の 15 点である。

【WEB メディア】

掲載日	見出し	媒体	執筆者・掲載者
2018/5/9	ルワンダ現政権は虐殺の加害者だった——新著が明かす殺戮と繁栄の方程式	Newsweek 日本版	米川正子
2018/8/27	コフィ・アナン負の遺産——国連はなぜルワンダ虐殺を止められなかったのか？	Newsweek 日本版	米川正子
2018/10/9	性的テロを告発したノーベル受賞医師の妻	東洋経済 ONLINE	米川正子
2018/10/16	コンゴの性暴力を止める責任は日本にもある	東洋経済 ONLINE	華井和代
2018/10/26	コンゴ人医師の功績	NHK これぞわかった！世界のいま	米川正子（掲）
2018/11/16	ノーベル平和性が問いかける紛争鉱物と日本の関係 コンゴの人権危機と日本の消費者とのつながりを研究する	東京大学 HP	華井和代
2018/12/14	“戦場の武器”性暴力の根絶を ノーベル平和賞で世界に訴え	NHK WEB 特集	米川正子（掲）
2018/12/21	米川正子「声をあげる」残虐を極めるコンゴの性暴力被害	情報・知識&オピニオン imidas	米川正子（掲）
2018/12/22	性暴力の大罪を犯す腐敗国家が減びない真因	東洋経済 ONLINE	米川正子

【雑誌】

発刊日	タイトル	媒体	出版社	執筆者
2018/5	コンゴ民主共和国の紛争資源問題	アフリカ夏号	アフリカ協会	華井和代
2019/1/1	コンゴの大量殺戮、「慰安婦」問題にも目を	ふえみん婦人民主新聞		米川正子
2019/2/8	コンゴ民主共和国の不正選挙と危機	世界	岩波出版	ジャン＝クロード・マスワナ
2019/2/12	ルポ あなたのスマホもその悲劇の一因かもしれない ノーベル平和賞を受賞したコンゴの医師が告発する“性的テロ”とは	婦人公論	中央公論新社	米川、華井へのインタビューをもとに、古川美穂氏が執筆
2019/3	私たちは性暴力を許さない：2 本のドキュメンタリー映画紹介「女を修理する男」	女性のひろば	日本共産党中央委員会	米川正子（インタビュー）

5.3 テレビ出演

ASVCC メンバーが出演あるいは取材協力したテレビ番組は以下の 5 件である。

放映日	番組名 & 番組タイトル	放送社	出演者
2018/10/31	プライムニュース BBT チャンネル 8「深掘り TOYAMA」	BBT	大平和希子
2018/12/15	教えて！NEWS ライブ 正義のミカタ「ノーベル平和賞のミカタ：婦人科医のデニ・ムクウェゲ氏がノーベル平和賞を受賞！実はシリア以上！？世界最悪の紛争が続くコンゴで蔓延する“性的テロリズム”とは？」	朝日放送	米川正子
2018/12/16	サンデーモーニング	TBS	米川正子
2018/12/23	NHK これぞわかった！世界の今	NHK	ASSVC ユース
2019/2/3	JNN ドキュメンタリーザ・フォーカス「ムクウェゲ医師の闘い ～なぜ、コンゴの悲劇は終わらないのか～」	TBS	（ASVCC 取材協力）

6. 会計報告（2018 年 4 月～2019 年 3 月）

2018 年度の収支は以下のとおりである。

収入		支出	
前年度繰越金 （調整費込み）	476,564 円	人件費	178,544 円
高木仁三郎市民科学基金 （研究助成金）	600,000 円	字幕監修費	100,000 円
個人寄付 ・ディアッコ亜紀様 ・開発教育協会（DEAR）主上 映会＋トーク 参加者の皆様 ・宇都宮大学主催上映会 参加 者の皆様 ・上原様 ・富山上映会 参加者の皆様 ・平岡高様	55,718 円	交通費	16,250 円
		会議費	3,240 円
		旅費	362,378 円
		【内訳】 ルワンダ調査 ブリュッセル会議	(137,370 円)
		ノーベル平和賞 授賞式＆イベン ト参加	(225,008 円)
		資料送付代	5,286 円
		書籍代	5,206 円
		文具代	6,170 円
セミナー参加費	22,500 円	印刷代	4,867 円
銀行利子	7 円	振込手数料	4,158 円
計	1,184,789	計	686,099 円
		来年度への繰越金	498,690 円

付録 1：ムクウェゲ医師によるノーベル平和賞受賞スピーチ全文

悲劇の始まり

1996 年 10 月 6 日の悲惨な夜、コンゴ民主共和国東部レメラにある私たちの病院が、反政府勢力に襲撃され、30 人以上が殺害されました。患者たちはベッドの上で虐殺され、逃げられなかった職員たちも無残に殺されました。当時の私は、これが単なる始まりに過ぎない、とは想像できませんでした。

99 年、レメラを去らざるを得なかった私たちは、東部ブカブでパンジ病院を設立しました。私が現在に至るまで、婦人科医として勤務している場所です。最初に診た患者はレイプの被害者で、彼女は性器を撃たれていました。背筋の凍るような暴力は、とどまることを知りませんでした。悲しいことに、こういった暴力は決して、止まることはありませんでした。

いつものようなある日のことです。病院に 1 本の電話がかかってきました。電話の向こう側で、同僚が涙ながらに懇願してきました。「私たちのところに早く救急車を！ 急いでっ！」と言うのです。

ですので、私たちはいつものように救急車を手配しました。2 時間後、救急車が戻ってきました。車内には 1 歳半ぐらいの女の子が乗っていました。女の子は大量出血していたため、急いで手術室に運び込まれました。私が到着したとき、看護師たちはみんなすすり泣いていました。女の子の膀胱（ぼうこう）と性器、直腸がひどく傷つけられていたのです。それらの傷は、大人の暴行によってできたものでした。私たちは静かに祈りました。おお、神よ、私たちが目にしているものは真実ではない、これは悪夢だ、と言ってください。私たちが目覚めたとき何事もなかった、と言ってください。しかし、それは悪夢なんかではありませんでした。それこそが現実だったのです。コンゴ民主共和国の新たな現実になったのです。

別の赤ちゃんが運び込まれたとき、この問題は手術室では解決できないことに私は思い至りました。私たちは、こういった残虐な行為をもたらす根本的な原因と闘わなければならないんだ、と思ったのです。私は、東部カブムの村に行き、男たちにこう話そうと決心しました。あなたたちの赤ちゃん、娘たち、妻たちをなぜ、守らないんですか？ 当局はどこにあるんですか？

驚いたことに、村人は性暴力の容疑者を知っていたのです。その男は州議会の議員で、人々に対して非常に強権的だったため、誰もが恐れていたのです。数カ月間、その男は民兵を使って村全体を恐怖に陥れました。その方法は、事実の発信に努める人権活動家の殺害でした。副議長であるその男は処罰されませんでした。議会における彼の特権が、刑事責任から免れることを可能にしたのです。

2 人の赤ちゃんのあとにも、レイプされた何人もの子どもたちが次々に運び込まれてきました。48 人目の犠牲者が来たとき、私たちは絶望の淵にいました。私たちは人権活動家とともに、軍事裁判所に向かいました。そうしてやっと、レイプ犯は強姦（ごうかん）罪で起訴され、人道に対する罪として裁かれたのです。

カブムに住む赤ちゃんに対するレイプは止まりました。そして、パンジ病院にかかってくる電話も鳴りやみました。しかし、こういった被害を受けた赤ちゃんの心理的、性的、そして生殖上の健康状態は、残酷なまでに損なわれています。カブムをはじめ、ベニヤカサイといったコンゴ民主共和国の他の場所でも、レイプや虐殺が今でも起こり続けています。その理由は何か。法の支配が及ばず、伝統的な価値観が崩壊しているからです。権力者は罪を免れることができるのです。

レイプ、虐殺、拷問、広範囲な社会の不安定、教育機会の甚だしいほどの欠如は、過去にないほどの暴力の連鎖を生み出しています。こういった道を外れた、仕組まれた混乱が人類にもたらす代償は、数十万人の女性に対するレイプ、400 万人を超える国内避難民、そして 600 万を超す人々の命を失うことでした。想像してください。デンマークの総人口に相当する人数が、殺されてきたのです。

国連の平和維持部隊と専門家たちに対しても容赦ありません。彼らのうち何人かは、任務の途中で殺されました。国連は今でも、コンゴ民主共和国で、状況の悪化を防ごうと活動しています。私たちは彼らに感謝しています。ところが、彼らの努力があったとしても、犯罪者が訴追されなければ、この人類の悲劇は続くでしょう。犯罪の野放しを許さないための闘いこそが、暴力の連鎖を打ち砕ける方法でしょう。私たちには、歴史の流れを変える力があります。闘うための信念が正しいものであれば。

コンゴの「資源の呪い」

お集まりのみなさま、私は、コンゴ民主共和国の人々の名のもとに、ノーベル平和賞を受けます。この賞は、性暴力の被害を受けた世界中の人たちに捧げられるものです。私は慈愛の心でここに立ち、紛争下で性暴力の被害を受けた人たちの声をはじめ、私の同胞たちの希望をお伝えします。私はこの機会に、何年にもわたって私たちの闘いを支えてくれた仲間に感謝の気持ちを伝えたいのです。なかでも、友好国の協会や組織、同僚、私の家族、そして私の大切な妻マデレーンに感謝しています。

私はデニ・ムクウェゲです。この星で最も豊かな国のひとつから来ました。しかし、私の国の人々は、世界で最も貧しいのです。

煩わしい現実があります。ゴールドやコルタン、コバルトといったあり余るほどの天然資源が、戦争や過激な暴力、絶望的な貧困の原因だという事実です。私たちは素敵な自動車、宝石、おもちゃが大好きです。私自身、スマートフォンを持っています。これらのものには、私たちの国で見つかった鉱物が使われています。ときには、鉱物の採掘は、子どもたちのほか、脅迫や性的暴力の被害者といった非人間的な状況下にある人たちの手で行われていることがあります。

電気自動車を運転するとき、スマホを使ったり、宝石に見とれたりしているとき、こういったものが作られる際の人的な代償について少しだけ、思いを巡らせてみてください。私たちは少なくとも消費者として、こういった製品は人間の尊厳に向けられる敬意とともに作られているのだ、ということをお忘れずにいましょう。悲劇から目を背けることは、共謀していることと同じです。責任を問われるのは、犯罪の実行犯だけではなくありません。直視しないことを選んだ人も含まれるのです。

私の国は、「指導者になる」と訴える人々によって組織的に略奪されています。彼らの権力や富、栄光のために略奪されているのです。そういった略奪の結果として、極度の貧困にうち捨てられた無実の男性や女性、子どもたちが数百万人もいます。その一方で、私たちの鉱物から得られた利益は、一握りの貪欲（どんよく）な指導者たちのポケットに入っておしまいです。

これまでの 20 年間、私がパンジ病院で見てきたものは、機能不全に陥った国家が招いた悲惨な結末です。赤ちゃん、女の子、若い女性たち、母親たち、おばあちゃんたち、そして、男性や少年たちもまた、燃えているプラスチックやとがった物体を生殖器に押し込まれ、性的暴行されてきたのです。それも、公然と、集団暴行されるのです。これ以上の詳しい話は、ここでは控えます。

重大な罪と正義

コンゴ民主共和国の人々は 20 年以上にわたり、国際社会が知る中で、侮辱され、虐待され、そして虐殺されてきました。非常に発達した通信技術が使える現代において、誰一人として「知らなかった」とは言えません。ノーベル平和賞の受賞により、私は世界に対して目撃者になることを呼びかけます。私たちに共通の人間性を損なわせる苦しみに終止符を打つため、私たちに加わるよう促します。

私の国の人々は死にもの狂いで平和を求めています。しかし……

どのように、共同墓地の上に平和を築くのでしょうか？

どのように、真実や和解がないなかで平和を築くのでしょうか？

どのように、正義や賠償がないなかで平和を築くのでしょうか？

こうして話している最中にも、ニューヨークにあるオフィスの引き出しで、ある報告書にカビが生えています。これは、コンゴ民主共和国で起きた戦争犯罪や人権侵害に関する専門調査の結果、まとめられた下書きです。この調査では、犠牲者の名前や現場の住所、日付が明らかにされています。しかし、実行犯の名前はありません。国連人権高等弁務官事務所によるこの報告書は、617以上の戦争犯罪や人道に対する罪、さらには集団虐殺さえも含まれているようです。この報告書を検討せずして、世界は何を待っているのでしょうか？ 正義なくして永続的な平和は存在しません。

コンゴ民主共和国やその周辺国で何が起こっているのか、注意深く公平な目で見える勇気を持ってください。広がり続ける災厄を食い止めるため、人道に対する罪を犯した者の名前を明らかにする勇気を持ってください。私たちの過去の過ちに向き合う勇気を持ってください。真実を述べ、記憶し、追悼する勇気を持ってください。

親愛なるコンゴ民主共和国のみなさん、私たちの運命は自分たちで定める勇気を持ちましょう。国の未来や平和を築き、アフリカにとってよりよい未来をともに作りましょう。私たち自身の手でやるしかないので。

サバイバー（被害者）の話

平和を愛する皆様。私が今日描いた絵は暗い現実です。しかし、ここでサラの話をお伝えします。サラは危機的状況で病院に運ばれました。サラの住む村は武装集団の攻撃に遭い、彼女以外の家族全員が虐殺されました。人質として森に連れて行かれ、裸で木に縛り付けられたサラ。そこで意識を失うまで毎日、集団で性的暴行を受けました。戦争の武器として使われる、そうしたレイプは被害者と家族、そして地域を破壊します。つまり社会構造を破壊するのです。

彼女が病院に着いた時、サラは歩くことも、自分の足で立つことさえも出来ず、排泄（はいせつ）も不自由でした。性器、膀胱（ぼうこう）、消化器に重い傷を受けた彼女が将来、自分の足で歩くことが出来るとは想像していませんでした。

時が経つにつれ、サラの目には生きる希望が輝き始めました。日々が過ぎていく中で、希望を見失わないよう医療関係者を励まし続けたのはサラでした。サラは美しく、笑顔にあふれ、強く、魅力的な女性です。今サラは、彼女のような悲惨な経験から生還した人々を助けることに尽力しています。サラは、私たちの被害者が元の生活に戻る手助けをする「ドーカス・トランジット・ハウス」から、生活再建のために 50 ドルを受け取りました。

現在、サラは小さなビジネスをしています。彼女は購入した土地にパンジ財団の手助けで屋根を張り、小さな家を建てました。独立した彼女は誇りを持っています。彼女の経験は、どんなにつらく絶望的な状況でも決意を持てば、トンネルの先に希望があると見せてくれています。もしも、サラのような女性があきらめないなら、誰があきらめることができるのでしょうか。

これはサラの物語です。サラはコンゴ民主共和国の人ですが、中央アフリカ、コロンビア、ボスニア、ミャンマー、イラク、そして世界中の多くの紛争国にサラのような人たちがいます。パンジ病院で私たちは、医療面や精神面だけでなく、社会経済的そして法的なものも含む、総合的なケアをしています。それは回復への道が長く困難でも、被害者が苦しみを変え、力になる可能性があることを示しています。彼ら被害者は、前向きな変化を社会にもたらす仲介者になることができるのです。それは既にブカブのリハビリ施設「シティー・オブ・ジョイ」(City of Joy)で起きています。そこでは女性たちが自分たちの運命を取り戻すための支援を受けています。しかし、自分たちだけで達成することは出来ません。私たちの役割は彼女たちの話を聞くことです。そして今日、私たちはナディア・ムラドさんの言葉を聞くのです。

親愛なるナディア。あなたの勇気、大胆さ、私たちに希望を与える能力は、世界中の人々や、私個人を奮い立たせる源となっています。今日、私たちに授与されたノーベル平和賞は、世界中にいる性

暴力の被害者の生活が確実に変わり、私たちの国々の平和の回復につながった場合に初めて、価値あるものになります。

私たちのすべきこと

では、私たちは何をすればいいのでしょうか。あなたは何が出来るのでしょうか。

まず第 1 に、私たち全員が同じ方向を向いて行動することが重要です。行動とは選択なのです。私たちが女性に対して暴力を止めるのかどうか。平和の時にも戦時にも男女の平等を促進する、良い意味での男らしさを発揮するのかどうか。その選択です。女性をサポートするのかどうか、彼女を守るのかどうか、彼女の権利を守るのかどうか、紛争で荒廃した国々で彼女のそばで戦えるのかどうか、といった選択です。紛争国で平和を構築するのかどうかの選択です。行動を起こすことは、無関心に対して「ノー」と言うことを意味します。もし戦争が起きれば、それは私たちの社会に巣くう無関心との戦争なのです。

第 2 に、私たちは、これらの女性とその愛する人たちに借りがあります。私たちは皆、この闘いに参加しなければなりません。性的暴力を容認する指導者を歓迎することをやめなくてはなりません。国家はそういった指導者にレッドカーペットを敷くのではなく、戦争の武器としてレイプを使用することに反対するレッドラインを引く必要があります。この赤い線は、これらの指導者に経済的、政治的制裁を科し、裁判所に連れて行くことになります。正しいことをすることは難しくありません。それは政治的意思の問題です。

第 3 に、私たちは性暴力を経験した女性の苦しみを認め、総合的な回復を手助けしなければいけません。私は被害者への賠償が必要だと訴えます。生存者に満足な補償を与え、新しい人生を始められるようにするのです。それは人間の権利です。私は、武力紛争における性暴力被害者の賠償のため、世界的な基金を創設する支援を各国に要請します。

第 4 に、コンゴ民主共和国で起こった虐殺により夫を亡くしたすべての妻、妻を失った夫、両親を失った孤児、そして愛と平和とともにある全てのコンゴ人を代表し、私は世界に呼びかけます。国連人権高等弁務官事務所がまとめた、コンゴ民主共和国での戦争犯罪の件数や犠牲者の名前、犯行現場などを記した報告書と、その勧告内容を検討するようにと。

正義が勝ちますように。

この報告書は、コンゴ民主共和国の人々が愛する人に涙し、死を嘆き、拷問した人々を許し、苦しみを乗り越え、穏やかな未来に自分自身を投影することを可能にします。

最後になりますが、この 20 年間に流血や性的暴行、人々の大規模な避難を経験したコンゴ民主共和国の人々は、政府が市民を守る責任を負うことを切実に待っています。ですが、政府はそれをする能力がない、あるいは、そうする意欲を持っていません。人々は永続的な平和を待ち望んでいます。平和が達成されるには、自由で透明性があり、信頼でき、平和な選挙が支持されなければいけません。

「コンゴ民主共和国の皆さん、一緒に働きましょう!」。アフリカの中心で、政府が人々に奉仕する国を作りましょう。法の支配の下にある国家を。全ての政治、経済、社会の行動が国民中心であり、コンゴ民主共和国だけではなくアフリカ全体の持続的で調和のある発展を。そして、全ての市民の尊厳を回復させるのです。課題は明らかです。それは私たちの手の届くところにあります。

すべてのサラ、コンゴ民主共和国のすべての女性や男性、子どものために、このノーベル平和賞を私の国の人々に授与するだけではなく、立ち上がって大声で叫びましょう。「コンゴ民主共和国での暴力は、もうたくさんだ。今こそ、平和を」と。

ありがとうございます。

出典：朝日新聞デジタル 2018 年 12 月 11 日『『暴力にノー、平和にイエス』ノーベル平和賞講演全文』

付録 2 : 主要なメディア掲載記事

【2018 年 10 月 7 日 (日) 朝日新聞朝刊】

平和賞女性の苦しみに光

紛争下の性暴力根絶のため闘ってきた2人に授与が決まったノーベル平和賞。その一人、アフリカ中部コンゴ民主共和国(旧ザイール)の婦人科医デニ・ムクウェゲさん(68)は2年前に来日し、被害の深刻さについて語っていた。関係者からは「女性たちの苦しみに光をあてた」と受賞決定を評価する声があがった。



記者会見するコンゴの性暴力と紛争を考える会の米川正子さん(中央)ら―東京都文京区

ノーベル賞 日本の支援者ら喜ぶ

「(紛争下の性暴力への)関心が高まることを期待したいが、それ以上に緊急に解決しなければならぬ問題だ」

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の米川正子さん(61)は6日、都内で会見し、こう訴えた。会は2016年、ムクウェゲさんを追った映画「女を修理する男」に日本語字幕をつけ、各地で上映会を開くため発足。同年に来日講演を実現させている。



今月来日するグラシエラ・ガルシア・ロメロさん(本人提供)

兵士によるレイプを「性

的テロリズム」と表現し、自国の惨状を世界に訴えるムクウェゲさんの活動は政府に敵視され、暗殺未遂にも遭った。被害者を治療する病院の運営資金も没収ではない。「ムクウェゲさんには現状を知ってもらえなくてはいけないのかの思いがある。一人ひとりが何ができるかを考えてほしい」

「女たちの戦争と平和資料館(wam)」(東京)の池田恵理子名誉館長(68)は、ムクウェゲさんが2年前に来日した際、資料館を案内した。「国境を越えて、国家が罪を犯して、女性が悪影響を及ぼすという状況を何とかしなければという気持ちを感じられた。この人が評価されたことは大歓迎だ」と話す。元慰安婦の女性の状況についても熱心に耳を傾けていたという。wamなどは、1970年代のアルゼンチン独裁政権下で、拉致監禁され、性暴力や拷問を受けた女性を日本に招き、講演会を開く準備を進めている。

女性、フリーカメラマンのグラシエラ・ガルシア・ロメロさん(69)。27歳だった76年、フエノスアイレスで拉致され、海軍技術学校に2年間、監禁された。「544」という番号で呼ばれ、定期的に性暴力や拷問を受けた。「いつ殺されるのか」といつも思っていたという。05年に被害者として裁判で証言した。

ノーベル平和賞

ムクウェゲさん映画 県内で上映会を

戦争の武器として性暴力が使われてきたアフリカ中部コンゴ（旧ザイール）で被害者の治療に尽くし、今年のノーベル平和賞に選ばれた産婦人科医デニ・ムクウェゲさん（66）。二〇一六年に来日した際、付き添った東京大学大学院総合文化研究科博士課程の大平和希平さん（28）が、富山県高岡市出身で、ムクウェゲさんの姿を追ったドキュメンタリー映画の上映会を県内で年内に催そうと計画している。（山中正義）



来日したデニ・ムクウェゲさんと記者会見する大平和希平さん（2016年10月4日、東京で「大平和希平さん展」開催中）

デニ・ムクウェゲ コンゴ東部南キブ州プカプカ生まれ。1999年にプカプカでパンジ病院を設立し、20年近く続く同国の紛争で性暴力の被害に遭った少女や女性5万人以上を治療してきた。携帯電話やパソコンといった電子機器などに利用されるスズやタンタル、タンタル、金などの貴重な鉱物資源を巡って、武装勢力が現地の少女や女性に組織的な性暴力を犯してきた事実もさまざまな機会で言及。女性の権利尊重も訴え続けている。2008年には国連人権賞、14年にはサハロフ賞も受賞した。

一昨年来日に協力 高岡出身・大平さん計画

「女性に寄り添い、平和をこの地に」という信念をもつて活動する姿に心が響いた。大平さんは蘭国ウガンダの平和構築などが専門だが、一六年に東京都内でムクウェゲさんを主役とした映画のDVD、日本語字幕入りで3月に完成した。

初公開された映画を見て強く感銘を受けた。「彼の言葉を生で聞きたかった」。上映会を主催した専門家でつくる任意団体「コンゴの性暴力と紛争を考える会」（東京）と意思を共にし、ムクウェゲさんの来日を実現。滞在中、報道対応などに関わった。

暗殺未遂に遭い、命の危険にさらされながら現地にどどまるムクウェゲさん。講演で「皆さんの意志や気持ちを集めてコンゴ人女性が勝利と平和を手にするまで活動を続ける」と力を込めた言葉が印象的だった。

来日は反響があり、このまま一過性のものでは終わら



作品は一五年のベルギーが主人公だ。性暴力の被害に遭った女性たちが再び自らの人生を歩み始める姿や、紛争を引き起こす原因となつていく「紛争動物」の生態にも迫る。

せてはいけない。高まった関心を継続し、さらに広げるため、日本語字幕を付けた「女を修理する男」のDVD制作を思い立った。大平さんはインターネットで資金を募るクラウドファンディングを担当し、今年三月に完成。映画配給会社を通じて、税抜き四千円で販売している。

大平さんは上映会場選びなどを進めている。「ムクウェゲさんの気持ちや女性の思いを感じ取り、世界から少しでも正義や不条理をなくせたらいい。知らないとも始まらない」と意義を強調する。「地元富山で、コンゴをはじめアフリカやムクウェゲさんの取り組みを伝え、関心を広げることが私にできること」

【2018年10月17日 中国新聞朝刊】

(同記事は、共同通信で10/7～10/20にかけ、各地新聞社に掲載された)



よねわ・まさこ 67年神戸市生まれ。神戸女学院大学。南アフリカ・ケープタウン大学で修士。96年国連難民高等弁務官事務所ONHCRで職員。コンゴ東部ゴマ事務局長などを歴任。立教大特任准教授を経て、現在は同大特定研究員。

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」代表 米川正子

識者評論

コンゴ(旧ザイール)で長年、性暴力被害者の治療に尽力した「ムクウェゲ医師」がノーベル平和賞に贈られることになった。

政府軍と反政府武装勢力の紛争が続くコンゴ東部では、レアメタル(希少金属)など鉱物資源と住民を支配する「武器」として性暴力が横行している。

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の働き掛けが実り、彼が2016年秋に来日した際、私はアテンド役を務めた。あまり感情を表に出さない知的な人だが、何の罪もない女性が性暴力の犠牲となっていることへの「怒り」が彼を突き動かしていると感じた。

コンゴ東部ではレアメタルのタンタルやタングステンを採る。それが採るために、過酷な鉱山労働におと

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の働き掛けが実り、彼が2016年秋に来日した際、私はアテンド役を務めた。あまり感情を表に出さない知的な人だが、何の罪もない女性が性暴力の犠牲となっていることへの「怒り」が彼を突き動かしていると感じた。

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の働き掛けが実り、彼が2016年秋に来日した際、私はアテンド役を務めた。あまり感情を表に出さない知的な人だが、何の罪もない女性が性暴力の犠牲となっていることへの「怒り」が彼を突き動かしていると感じた。

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の働き掛けが実り、彼が2016年秋に来日した際、私はアテンド役を務めた。あまり感情を表に出さない知的な人だが、何の罪もない女性が性暴力の犠牲となっていることへの「怒り」が彼を突き動かしていると感じた。

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の働き掛けが実り、彼が2016年秋に来日した際、私はアテンド役を務めた。あまり感情を表に出さない知的な人だが、何の罪もない女性が性暴力の犠牲となっていることへの「怒り」が彼を突き動かしていると感じた。

日本人と無縁ではない

ムクウェゲ医師にノーベル平和賞

れ、日本人の生活とも無縁ではない。関心の高まりを望みたい。

フルストロム元国連事務総長特別代表(紛争下の性暴力担当)はコンゴ東部を「世界のレイプの中心地」と呼んだ。その言葉通り、あらゆる性暴力が実行され、被害者や家族、地域社会を破壊してきた。

家族の前で集団レイプされた女性がいる。性暴力に親をねじ込まれ、発露された人もいる。熱で溶かしたゴムなどを性器に流し込まれたケースもあった。

多くの場合、鉱山地域の

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の働き掛けが実り、彼が2016年秋に来日した際、私はアテンド役を務めた。あまり感情を表に出さない知的な人だが、何の罪もない女性が性暴力の犠牲となっていることへの「怒り」が彼を突き動かしていると感じた。

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の働き掛けが実り、彼が2016年秋に来日した際、私はアテンド役を務めた。あまり感情を表に出さない知的な人だが、何の罪もない女性が性暴力の犠牲となっていることへの「怒り」が彼を突き動かしていると感じた。

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の働き掛けが実り、彼が2016年秋に来日した際、私はアテンド役を務めた。あまり感情を表に出さない知的な人だが、何の罪もない女性が性暴力の犠牲となっていることへの「怒り」が彼を突き動かしていると感じた。

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の働き掛けが実り、彼が2016年秋に来日した際、私はアテンド役を務めた。あまり感情を表に出さない知的な人だが、何の罪もない女性が性暴力の犠牲となっていることへの「怒り」が彼を突き動かしていると感じた。

【2018年11月11日 朝日学生新聞掲載記事】

性暴力根絶へ女性に寄り添う

ノーベル平和賞に決定

コンゴ民主共和国の医師 ムクウェゲさん

紛争地で性暴力を受けた女性たちにより、被害をなくそうと活動してきたアフリカ中部のコンゴ民主共和国(コンゴ)の医師ムクウェゲさん(53)が今年のノーベル平和賞に決まりました。イラクの少校級サジディ大佐のナディア・ムラド・バセ・タハさん(25)も同時に受賞します。ムクウェゲさんは「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の支援で、2016年に来日しています。会の代表の米川正子さん(51)に、ムクウェゲさんの取り組みや受賞の経緯を聞きました。(飯山敦子)



【ムラドさんと同時受賞】ムラドさんは自らが経験した「イスラム国」(IS)から受けた性暴力を国際社会に発信して来たことを評価されました。ノルウェーのノーベル委員会では、2人への受賞理由を「性暴力という戦争犯罪に焦点を絞り、なくそうと努める意気込みを賞した」と説明しています。

【上院会情報】受賞の発表を受け、米川正子(女)は「女性を支援する男」の上院会が実施で行われます。上院会には、女子大生(東京大学)や女子大生(東京大学)が参加します。上院会では、女子大生(東京大学)や女子大生(東京大学)が参加します。上院会では、女子大生(東京大学)や女子大生(東京大学)が参加します。

【上院会情報】受賞の発表を受け、米川正子(女)は「女性を支援する男」の上院会が実施で行われます。上院会には、女子大生(東京大学)や女子大生(東京大学)が参加します。上院会では、女子大生(東京大学)や女子大生(東京大学)が参加します。上院会では、女子大生(東京大学)や女子大生(東京大学)が参加します。

治療・心のケア継続 世界を回って講演も

ムクウェゲさんは、1988年にコンゴ東部のゴマで性暴力の被害を受けた女性たちを支援する「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の代表として活動しています。彼は、性暴力を受けた女性たちを支援するために、世界を回って講演を行っています。

鉱物資源めぐる紛争が原因

編集委員

インタビュー

危険顧みず「人間益」追求

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」代表 米川 正子さん(51)に聞く

よねかわ・まさこ 1967年神戸市生まれ。神戸女学院大学、南アフリカ・ゲープタウン大学大学院で修士号。国連ボランティアを経て96～2008年、UNHCR職員。16年から立教大特定課題研究員。



宝塚市(撮影・後藤亮平)

ノーベル平和賞医師、ムクウェゲ氏の素顔は？

ノーベル賞の授賞式がスウェーデンとブルネーで10日現地時間に行われる。今年の平和賞は、紛争の続くアフリカ中部のコンゴ民主共和国出身の女性で性暴力と闘い、被害女性の治療に尽力してきた産婦人科医アリ・ムクウェゲ氏(63)に贈られる。現地では国民的英雄と受け止められ、同氏の命がけの活動を知る米川正子さんは「私たちの生活に無縁の問題ではない」と驚き、とらえどころのない人物だ。(新報編集部)

「コンゴ。どんな国ですか。」
「国連難民帰還弁務官事務所(U.N.H.C.R.)職員として、1998年から2008年までにほぼ4年、勤務しました。国土は日本の6倍と広く、食料も豊か。国民性は明るくてフレンドリーで、関西人って感じですよ。ただ近年は後半に大規模な内戦が起き、東部では今も紛争が続いています。レア・メタル(希少金属)などの鉱物資源が豊富ですが、それが紛争の資金源でもあり、略奪を目的としたレア・メタルが後を絶ちません」
「ムクウェゲ氏は98年、コンゴ東部に病院を設立。2年前、米川さんらの招きで初来日しました。ハートもスケールも大きく、小さなことにこだわらない方が、困窮している国々にはありがたす。人間益の追求」という言葉がひびく。今回の受賞は紛争下の性暴力を世界に向けて告発してきた活動が評価されましたが、米川氏は驚き、女性の人権尊重も訴えきた。弱者への強い思いを持つ女性です」
「これまでに治療した女性は5万人以上になるとか。医師を中心に国際的なチームを組み、治療に加え、心理的なケアや生活支援、加害者を罰するための活動も続けています。一方で、コンゴ政府から監視され、6年前には逮捕されたこともあり、一時的に欧州に避難しました。それでも患者たちを手助けするのを止めてお金をつくり、留置中の処置を買いたいと申し出て、戻ってこられた。現在、国連平和維持活動(P.K.O.)の部隊が警備にあたっています。前線職員への脅迫は絶えないと聞いています」
「その中、何がムクウェゲ氏を動かしているのでしょうか。なぜ紛争がいつまでも終わらないのか、なぜこれほど貪欲に奪い合うのか。そういうことへの怒りではないか。コンゴ東部は長く「女性と少女にとって世界最悪の場所」だと知られてきて、国連などでは悲憤してきただけで、被害者を訴えたいこともあって大多数のコンゴ人は動かないまま。悔いを感ずられると聞いています」
「平和賞については、アリ・ムクウェゲ氏は欧米諸国では以前からよく知られており、もっと手書きされてもよかった。でも今回(選定委員組織「イスラ

資源問題、日本と関係も

△国による性暴力を受け、その根絶を訴える「イラクのナディア・ムラドさん」と同時受賞となったのは驚き深い。米川氏は、そして支援する側と被害者が一緒に選ばれたことで、世界共通の問題として受け止めてもらえたのでは、私たちにできることは何でしょうか」
「アフリカや中東の問題で、自分たちと関係ないと思う人は多いかもしれない。でもコンゴで、時に住民の犠牲を伴って採掘された鉱物は携帯電話やパソコンなどに使われており、身近に感じられる。私たちの日常生活と無縁ではない。資源の自由流通も知ってほしいのです。受賞を機に、ムクウェゲ氏のドキュメンタリー映画『女を修理する男』が日本で再上映されています」
「ムクウェゲ氏は紛争下の性暴力を『性的アロリズム』と呼んでいる。人々に恐怖を与え、地域社会を支配する『武器』だからです。根絶するためには紛争自体を止める必要がありますが、国際社会の関心は低い。これまで600万人以上の死者が出ているとされ、第2次大戦後、一地域の犠牲者数としては世界最大級なのに、私たちの「コンゴの性暴力と紛争を考える会」でこの地域の支援も検討しています。いつか情勢が落ち着けば、必ず訪問を訪ねたいと思っています」

記者のひとこと

支援の現場に長く身を置き「一緒に何かをつくり上げていく気持ち」を胸に刻んできた。映画「女を修理する男」は10月午後6時から神戸市外国語大で上映。ムクウェゲ氏のファンになってしまう人も多いという。

【2018 年 10 月 9 日 東洋経済 ONLINE】

性的テロを告発したノーベル受賞医師の凄み

ムクウェゲ氏が平和賞を受賞した 3 つの意義



性暴力被害に取り組んできた功績が評価され、ノーベル平和賞を受賞したコンゴのデニ・ムクウェゲ医師
(写真：Vincent Kessler／REUTERS)

10 月 5 日、コンゴで性暴力の被害に苦しむ人々の治療に当たってきたデニ・ムクウェゲ（Denis Mukwege）医師に対し、ノーベル平和賞が授与されることが決まった。性暴力問題に対峙するムクウェゲ医師が受賞した大きな意義について、2016 年に同医師の来日を実現した米川正子・立教大学特定課題研究員が解説する。

コンゴ民主共和国の婦人科医デニ・ムクウェゲ氏が、イラク人のナディア・ムラド氏とともに 2018 年のノーベル平和賞を受賞した。

ムクウェゲ医師は 1999 年にコンゴ東部のブカブにパンジ病院を設立して以降、暗殺未遂に遭いながらも、医療、心理ともに 4 万人以上のレイプ・サバイバー（性暴力被害者）を治療してきた。

ノーベル賞委員会は受賞理由を「戦争や武力紛争の武器としての性暴力」撲滅への貢献を挙げている。筆者はこの 20 年間コンゴに関わり、2013 年以降、ムクウェゲ医師の活動を日本に紹介してきた。今回の受賞は大きな喜びであり、心から祝福したい。

性暴力ならぬ「性的テロリズム」

筆者は、1998 年から 2008 年までに通算 4 年間、コンゴ東部、西部と首都キンシャサで国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）職員として勤務した。最後の勤務地である東部のゴマで UNHCR 所長を務めた際に、レイプのサバイバーに会ったことから、紛争下の性暴力の問題に関心を寄せるようになった。

UNHCR を退職後、コンゴの紛争に関する研究に従事し、ムクウェゲ医師の演説を聞いたり、医師の論文を読み始めたりした。2016 年に任意団体「コンゴの性暴力と紛争を考える会」を発足させ、ムクウェゲ医師の活動を描いたドキュメンタリー映画『女を修理する男』（原題「The Man Who Mends Women」）に日本語字幕を付けて全国各地で上映し、同年にはムクウェゲ医師の初来日を実現した。



ノーベル賞の授賞式が開かれるノルウェー・オスロに展示されたデニ・ムクウェゲ氏（左）とナディア・ムラド氏の似顔絵
（写真：Nerijus Adomaitis／REUTERS）

ムクウェゲ医師が受賞した意義はどこにあるのか。それを解説する前に、まずは紛争下の性暴力が「戦争の武器」である実態を知る必要がある。

ムクウェゲ医師の受賞発表後、さまざまな報道が相次いでいるが、どのような目的で武器として性暴力が悪用されているかについて十分に認識されていないようである。

性暴力は加害者の性的欲求から行われることもあるが、経済的、政治的な理由から組織的に生じることも多い。紛争下の性暴力に相当な影響力と破壊力があるため、ムクウェゲ医師は性暴力ならぬ「**性的テロリズム**」と呼んでいる。

性的テロリズムは、世界各地で広く使用されている自動小銃「AK47」のような武器と違って購入とメンテナンスを必要としないため、費用がかからず、体一つで多くの人々を精神的にも身体的にも痛い目に遭わせられる。

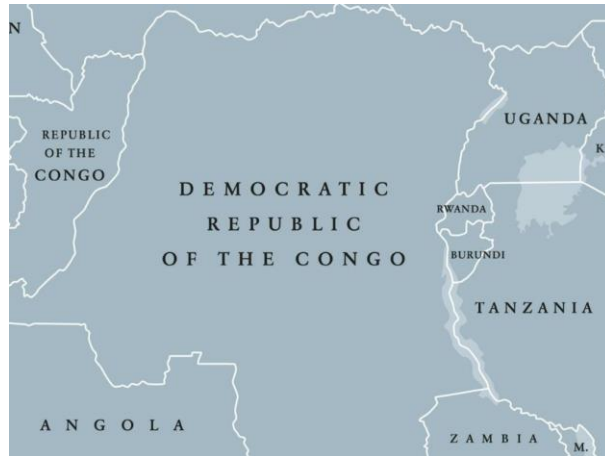
しかも、時折例外もあるが、被害を受けた身体の一部が女性としては他人に見せにくい部分であるため、性的テロリズムはその証拠を残すことも安易に他人に見せることもできず、不可視化されている。

加えて、コンゴのような紛争国では司法制度はほぼ機能していない。結果として、加害者は不処罰でいることが多く、まさに**最も効果的で安上がりな武器**である。

性的テロリズムは恐怖心を植え付ける

その性的テロリズムが「意図的な紛争手段」として経済的に利用されているのは、コンゴ東部が**豊富な鉱物資源を有していることと関係している**。

コンゴ東部の資源産出地域および流通経路は、コンゴ国内や近隣国のルワンダとウガンダの武装勢力（国軍と反政府勢力の両アクター）が支配している。武装勢力が鉱山の周辺地域で性暴力をふるうことによって、性暴力のサバイバーとその家族だけでなく、コミュニティ全体に恐怖心を植え付けられる。



コンゴの鉱物資源をめぐる、ルワンダ、ウガンダの武装勢力との争いが絶えない
(写真：Peter Hermes Furian／PIXTA)

なぜ恐怖心を植え付けることが重要なのか。それは、加害者、つまり武装勢力にとって住民を支配するのに非常に都合がよいからだ。

まず、集団レイプが家族の前で犯されることが多いのに、性暴力が不名誉なこととしてサバイバーやその家族を苦しめ、恥や無価値であるといった精神的なダメージをもたらす。村の生計を支える農作業や商業においては女性の働きが重要であるが、直腸まで達するような傷を受けると女性は働けなくなるため、農業や商業が破綻してしまう。

そして、性的テロリズムの残虐さを見せつけられたコミュニティの住民は、恐怖のあまり他の地域や国外に移動を強いられたり、政府や武装勢力に立ち向かう気力を失ったりして従順になる。このような従順な奴隷労働者は鉱山で必要としている。何しろ、鉱山の労働環境は非常に苛酷であるからだ。

こうした鉱物資源と性暴力の関係について、国連も 2015 年の文書で、「資源と鉱山集落の支配をめぐる武装勢力間の競争は、増加している文民の移動、人身売買や性的虐待と関係している」と指摘している。

ムクウェゲ医師らの調査でも、鉱物が豊富な地域と性暴力の発生地が一致していることが指摘されたが、それはあくまでも限られた地域のみであり、さらなる調査が必要だと明記している。

こうした資源利用によるコンゴ東部の性的テロリズムと紛争の長期化は、グローバル経済を通じて、日本にいる私たちの暮らしともつながっている。

特に紛争資金源として利用されている 4 鉱物（スズ、タングステン、タンタル、金）は、世界各地で産出される鉱物と混ざって、携帯電話やパソコンなどの電子機器から自動車や航空機に至るまで、あらゆる工業製品に使用されている。

さらに悪いことに、コンゴ東部における性暴力は典型的な（集団的）レイプだけではなく、木の枝、棒、瓶、銃身や熱い石炭などが性器に挿入されたり、時には集団レイプの後、膣が撃たれたりすることもある。

それによって、女性の性器が機能なくなると子どもを産めなくなり、まさに、性的テロリズムは命を産みだし育てる存在としての女性とその性器を破壊する意図を持って行われているのだ。

それが長期的に現地の人口減少につながり、その結果、上記の強制移動と奴隷労働に加えて、武装勢力はますます資源産出地域を支配しやすくなる。



ムクウェゲ医師の治療を受けるため、バンジ病院で待つ女性たち（写真：Crispin Kyalangalilwa／REUTERS）

最悪の環境で闘うムクウェゲ医師受賞の意義

ムクウェゲ医師がノーベル平和賞を受賞した意義は 3 点あると思われる。

第一に、医師がコンゴの性的テロリズムのサバイバーを治療した最初の婦人科医であり、コンゴ東部における鉱物の略奪を目的に国軍や反政府勢力が性暴力を犯し続けた事実について、国連本部をはじめ世界各地で声高に非難し、女性の人権尊重を訴えてきた最初の人物であることだ。

ムクウェゲ医師が手術するケースも、性器破壊が原因で生じているものが多く、「**集団レイプによって生じる体内の傷を治療する世界一流の専門家**」とも呼ばれている。

第二に、ムクウェゲ医師が、コンゴの問題だけでなく、世界における紛争下の性暴力や女性の人権の尊重について訴えてきたことだ。このようなアドボカシー活動をしている女性は世界各地にいるが、男性は大変珍しい。

ムクウェゲ医師は時間の 25% をアドボカシー活動に費やし、特に紛争下の性暴力を止めるために世界各地を回っている。筆者が 2016 年、来日したムクウェゲ医師をアテンドした際も、会話の中でボスニアやコロンビアなどで出会った性暴力のサバイバーの話が何度か出た。

韓国でソウル平和賞を受賞した際には、ムクウェゲ医師は「日本政府は被害者の（元慰安婦の）要求を受け入れ、赦しを求めなければならない」とコメントした。核兵器や化学兵器を規制するのと同様に、戦争の武器としての性的テロリズムも規制されなければならないとアピールしている。

第三に、ムクウェゲ医師が暗殺未遂に遭い、コンゴで親友や人権活動家などが暗殺されながらも闘ってきたことだ。

無論、同時受賞したムラド氏も過去に受賞者の多くも、リスクを負いながら活動してきた。ムクウェゲ医師が他の受賞者と違う点は、「**世界のレイプ中心地**」「**女性と少女にとって世界最悪の場所**」とも描写されているコンゴ東部の最悪の環境で危険を顧みず治療に当たってきたことだろう。

1996～1997 年の第一次コンゴ紛争においては、「**ジェノサイド（民族浄化）**」とも特徴づけられる非人道的行為が行われた（国連報告書、2010 年）。1998～2002 年の第二次コンゴ紛争においては、周辺国をはじめとする約 17 カ国が軍事的や政治的に介入して「**第一次アフリカ大戦**」とも呼ばれる大規模な国際紛争に発展した。

2003 年に公式には紛争が終結してもなお、コンゴ東部では複数の武装勢力による活動が継続し、累計で約 600 万人という、**第二次世界大戦後の世界において、一地域の犠牲者数としては最大の規模**になっている。

コンゴ問題は日本人も無縁ではない

今回の受賞をきっかけに、紛争下の性暴力に関心が高まることが期待できるが、それだけでは足りない。コンゴのサバイバーは 20 年間、「国際社会」による解決を待ち続け、その間男性も含めて多くのサバイバーが亡くなっている（男性のサバイバーの多くは自殺している）。

コンゴにしる、他の地域にしる、性的テロリズム、そして紛争自体に終止符を打たなければ意味がない。紛争が長期化している原因の 1 つに加害者が不処罰でいることが挙げられる。実は、**国際刑事裁判所（ICC）はこれまで、コンゴ東部における性暴力の加害者を一人も起訴したことがない**。事態の打開へ向け、ICC はもっと積極的に関与する必要がある。なお、性暴力がコンゴ東部ほど蔓延していない同北東部で犯された性暴力の責任者は起訴されている。



ムクウェゲ医師はバンジ病院で、ノーベル平和賞を「紛争で傷ついた全ての女性にささげる」と述べた
（写真：Crispin Kyalangalilwa／REUTERS）

同様に、コンゴで起きている紛争とはコンゴ人同士が戦闘している内戦ではなく、地域紛争、あるいは**大国などが間接的に関与している国際紛争**であるため、ムクウェゲ医師が訴えてきたように、さまざまな指導者らが非暴力な形で政治的解決をしなければならない。

このようにコンゴをめぐる解決すべき問題が山積している。加えて、世界最大級の国連平和維持活動軍（PKO）が派遣されているが、なぜコンゴ東部で世界規模の紛争が続いているのか。なぜ「資源の呪い」が起きているのか。さまざまな疑問が残る中、研究や活動に従事する人が増えることが期待されている。

コンゴと日本の関係をさかのぼっても、広島に投下された原爆には、コンゴ産のウラニウムが含まれていた。そして、現在の日本も、グローバル経済を通じてコンゴと関係性がある。にもかかわらず、これらの事実は十分に認識されていない。

ムクウェゲ医師への関心の高まりとともに、性的テロリズムの実態だけでなく、コンゴに関心を持つ日本人が増えることに期待したい。

【2018 年 10 月 16 日 東洋経済 ONLINE】

コンゴの性暴力を止める責任は日本にもある

ノーベル受賞医師はなぜ闘う必要があるのか



コンゴ民主共和国東部イジュウィ島の鉱山で作業に集中する労働者（写真：アジア太平洋資料センター）

コンゴで性暴力被害者の治療に取り組んできたデニ・ムクウェゲ医師に対し、ノーベル平和賞が授与されることが決まった。ムクウェゲ医師が性暴力問題と対峙しなければならない背景には、コンゴにおける性暴力と紛争鉱物の結びつきがある。各国政府や企業による紛争鉱物調達調査の実施状況などを研究する華井和代氏が解説する。

紛争によって 20 年間で 600 万人もの命が失われてきたコンゴ民主共和国。残念ながら、日本人のコンゴ問題に対する関心は低い。だが、日本で暮らす我々一般市民も、実はコンゴ問題と身近なところで関わっている。

コンゴは世界有数の資源産出国であり、コバルト、ダイヤモンド、銅、金、レアメタルなどの鉱物が産出される。そして、この鉱物資源のために、コンゴでは争いが絶えない。その結果として、産出地域の住民に性暴力という人権侵害をもたらされているのである。

こうした地域で産出された資源は巡り巡って、電子機器や携帯電話などの原料という形で我々日本人の生活に便利さをもたらしている。2016 年 10 月に東京大学で講演した際、ムクウェゲ医師はこう呼びかけた。

「私たちは、消費者として、私たちが買う商品のなかにどのようなものが使われ、どのようなところからきているのかを確認する責務があります。それが、女性の破壊、人権侵害を経て作られたものでないかどうかを、販売する人に尋ねて確認して買う必要があります」



ノーベル平和賞を受賞したデニ・ムクウェゲ氏
(写真：REUTERS/Vincent Kessler)

資源大国なのに最貧国

1996 年に始まる 2 度のコンゴ紛争は、2003 年に公式には「終結」とされている。しかし、コンゴ東部では複数の武装勢力がその後も活動を続け、紛争主体の数は 2012 年時点で 40 を超え、2015 年には

70 に増えている。加えて、コンゴ国軍の中にも住民への人権侵害に関与する部隊や兵士がいる。隣国ルワンダとウガンダの関与も疑われている。

こうした紛争主体が資金源として利用しているのが鉱物であり、それは「紛争鉱物」とも呼ばれる。武装勢力や軍は、主にスズ、タンタル、タングステン、金（以下、3TG）の鉱山を実効支配し、周辺の村を襲撃して住民を殺害したり過酷な鉱山労働に就かせたりして、採掘した鉱物を密輸して紛争資金を得ている。

採掘された鉱石は、他の地域の鉱石と混ざって、携帯電話やパソコンなどの電子機器を中心とする多様な工業製品の原料となり、世界中に輸出されている。にもかかわらず、コンゴは人間開発指数（HDI）で188カ国中178位の最貧国であり、豊富な資源が住民の豊かさに結びついていない。「コンゴは扉も窓もない宝石店のようなもの」とムクウェゲ医師はたとえる。

紛争鉱物問題に対して国際社会が無策だったわけではない。経済協力開発機構（OECD）は2010年、企業が自社の鉱物調達経路からコンゴの紛争鉱物を排除する取り組みを行うよう求めた。アメリカでは2010年7月の金融規制改革法（通称ドッド・フランク法）1502条によって独自の紛争鉱物取引規制が制定された。

紛争鉱物取引規制の導入によって、国際社会の取り組みにはさまざまな影響があった。

まず、武装勢力や軍の介入がない、児童や妊婦の労働が行われていない、などの基準をクリアした鉱山の鉱石にはタグを発行するなど、紛争鉱物の認証システムが普及し始めている点が挙げられる。取引所や製錬所がタグ付きの鉱物しか購入しないことで、紛争フリーの鉱物しか流通しない仕組みを構築した。

次に、3TGを使用する企業による紛争鉱物調達調査が大規模に行われている点が挙げられよう。前出のドッド・フランク法1502条では、アメリカ証券取引委員会（SEC）に上場している企業に対して、自社の製品の製造または機能に3TGを使用しているかを調査し、使用している場合には原産地を特定すること、原産地がコンゴとその周辺国である場合には、紛争に関わった鉱物ではないかどうか、サプライチェーンを遡ってでも調査することを求めている。

アメリカ会計検査院（GAO）の報告によれば、2017年に調査結果をSECに報告したアメリカ企業は1165社であった。だが、GAOによれば、2017年の段階で自社が使用する3TGの原産地が特定できたアメリカ企業は53%にとどまっている。

日本はどう対応してきたか

他方、日本では紛争鉱物取引規制にあたる法律が制定されていない。とは言っても、アメリカのSEC上場企業と取引をしている場合には顧客企業からの調査がおよぶため、電子機器産業、自動車産業、化学工業を中心に数多くの企業が調査を実施している。

2012年には、電子機器企業の業界団体である電子情報技術産業協会（JEITA）が責任ある鉱物調達検討会を設立し、調査方法の統一と普及に取り組み始めた。JEITAの調査によれば日本の電子機器企業で製錬所が特定できたのは12%にとどまっている。

紛争鉱物調達調査には困難がともなうために、最上流であるコンゴ東部の鉱山周辺で直接、紛争フリー鉱山からの購入（Boycottに対してBuycottとよばれる）や住民支援を行うことで問題解決を導こうとする動きが見られる。これが第3の取り組みである。

情報機器企業のMotorola Solutionsとタンタル・コンデンサー製造企業のAVX（京セラの関連会社）は、2011年にSolutions for Hopeプログラムを立ち上げ、紛争フリーの認証を受けたタンタル鉱山と直接契約を結んで鉱物を調達する取り組みを始めた。

暴力は悪化した

それでは、取り組み強化によって紛争鉱物問題は解決したのであろうか。残念ながら、答えはノーである。

確かに、鉱山からの武装勢力の撤退、という点においては、一定の効果が見られる。2419 カ所の鉱山を調査した International Peace Information Service (IPIS) によれば、3TG 鉱山の 80%以上から、武装勢力や軍が撤退した。

しかしその一方で、ノルウェーのオスロ平和研究所の Armed Conflict Location and Event Data (ACLED) によれば、2010 年以降には武力衝突や市民への暴力が増えている。2017 年には 1021 件の事件が起こり、3168 名が犠牲となった。さらに、国連人口基金 (UNFPA) の報告によれば、性暴力の被害は 2016 年の 2593 件から 2017 年の 5783 件に倍増している。

なぜ、規制の制定後にむしろ暴力が悪化したのか。その原因は、コンゴのカビラ大統領が実施した鉱物禁輸にある。

2010 年 7 月にアメリカでドッド・フランク法 1502 条が制定されると、カビラ大統領は 9 月に大統領令を発し、東部の紛争地域である北キヴ州、南キヴ州、マニエマ州からの鉱物輸出を停止した。翌 2011 年 3 月までの禁輸期間に、当該 3 州では鉱物の価格が下落した。

そのため、鉱山労働者や、鉱物取引および鉱山周辺での小規模ビジネスに従事していた住民は生計手段を失い、生活状況が悪化した。さらに、鉱物からの利益が得られなくなった武装勢力が周辺住民に対する略奪行為を増加させ、人道状況はむしろ悪化したのである。

アメリカでは、紛争鉱物取引規制をめぐる議論の中で、「紛争鉱物のボイコットは、鉱山労働者を失業させ、住民の生活をむしろ悪化させる」「鉱物からの利益が得られなくなった武装勢力が、住民への略奪に走る可能性がある」という懸念が示されていた。

それにもかかわらず、コンゴ政府自身が鉱物禁輸を実施したことでボイコットが行われてしまい、懸念していた通りに住民の生活状況、人道状況が悪化してしまったのである。

日本にも責任がある

それでは、住民に悪影響をおよぼした紛争鉱物取引規制は実施されないほうが良かったのだろうか。規制の導入により、国際社会はコンゴの紛争鉱物問題に真剣に向き合わざるを得なくなったことを考えると、すべてが悪かったわけではない。

今後、コンゴの中央政府や地方政府に対して国際社会からの圧力を高めること、あるいは、政府を介さずに直接住民の生活を支援する援助が行われることで、コンゴ東部の状況を改善しようとする動きが高まるものと予想される。



ムクウェゲ氏は 2016 年、東京大学で講演を行い、問題の解決を訴えた（写真：華井和代）

ムクウェゲ医師は 2016 年、東京大学で行った講演でこう訴えかけた。

「従属を強いられ、性暴力にあっている女性たちの尊厳のために立ち上がりましょう。そして、声をあげて悪を糾弾し、このシステムから利益を得ている人たちを糾弾しましょう。声をあげて人間性の豊かな社会を実現しましょう」

コンゴにおける性暴力を止める責任は、日本の政府・企業・一般市民にもある。ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞が、日本における関心の高まりをもたらすのみならず、コンゴにおける性暴力を止めるための具体的な活動が始まるきっかけとなることを切に願う。

【2018 年 12 月 22 日 東洋経済 ONLINE】

性暴力の大罪を犯す腐敗国家が減びない真因

国連の弱腰姿勢にノーベル賞医師が怒り心頭



コンゴでは過去 20 年以上、混乱が続いている（写真：Kenny Katombe／REUTERS）

今年 12 月 10 日、人権保障の目標や基準をうたった「世界人権宣言」が国連で採択されて 70 周年を迎えた。その記念すべき日に、ノルウェー・オスロで開かれたノーベル平和賞授賞式に、コンゴ民主共和国の婦人科医デニ・ムクウェゲ氏が姿を見せた。

コンゴで 5 万人以上のレイプ・サバイバー（性暴力被害者）を治療し、戦争や武力紛争における性暴力の撲滅に貢献したことが評価されての受賞だった（参考：性的テロを告発したノーベル受賞医師の凄み）。

「正義が勝ちますように」

ムクウェゲ医師は、世界のメディア、有力者や一般の人々が注目する授賞式の場において、ここぞとばかり、コンゴ東部における世界最悪の人権侵害の状況、そしてコンゴや周辺国政府と国連にとって「タブー視」されている政治的問題を繰り返し語り、あるいは思い起こさせた。

筆者は過去、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の職員としてコンゴの難民保護・支援や政策立案に当たってきた。現在は「コンゴの性暴力と紛争を考える会」で代表を務め、ムクウェゲ医師が世界各国で行った演説の内容も把握している。その筆者の感覚からいっても、今回の演説はこれまで以上に力強い内容だった。

問題が解決しない現状に怒り

ムクウェゲ医師が語気を強めた背景には国際社会の無関心がある。

コンゴ紛争下の性暴力は、加害者の性的欲求だけでなく、「性的テロリズム」と呼ばれる武器として軍によって用いられている。こうした凄惨な犯罪〔大量殺戮（さつりく）や強制移動など〕は過去 20 年間、国連、人権 NGO とフランス・スペイン判事の報告書を通して明らかにされていた。

にもかかわらず、国際社会はそれを黙認し続け、現在に至っている。性暴力の被害者と対峙してきたムクウェゲ医師は、問題が一向に解決へ向かわない現状に我慢できないのだ。

ムクウェゲ医師が 2016 年に初来日した際、筆者は成田空港まで出迎えて初対面し、東京までの車内でアテンドした。ムクウェゲ医師はその際にも、「国連人権高等弁務官にも直接面会したが、特に反応がなかった」と怒りをあらわにしていた。

ムクウェゲ医師の演説には、政治的なメッセージが 2 つあったと考えられる。第 1 に、国連とコンゴ隣国のルワンダ政府が触れてほしくない過去に言及した。

国連人権高等弁務官事務所（OHCHR）は 2010 年 10 月、コンゴにおける重大な人権侵害問題の実態を調査したリポートを公表した。550 ページに及んだ報告書は、目撃者 1280 人へのインタビューを基に、1993～2003 年にコンゴ全土で起きた犯罪が記録されている。

この報告書に関し、ムクウェゲ医師はこう述べた。

ニューヨークにあるオフィスの引き出しで、ある報告書にカビが生えています。これは、コンゴ民主共和国で起きた戦争犯罪や人権侵害に関する専門調査の結果、まとめられたものです。この調査では、犠牲者の名前や現場の住所、日付が明らかにされています。

しかし、実行犯の名前はあります。国連人権高等弁務官事務所によるこの報告書には、617 件以上の戦争犯罪や人道に対する罪、さらには集団虐殺さえも含まれているようです。この報告書を検討せずして、世界は何を待っているのでしょうか？

ここで言う「ニューヨークにあるオフィス」とは国連本部を指す。コンゴにおける不処罰と暴力の連鎖を終えるため、報告書の内容や提言は重要であった。が、報告書の内容は公表されて 8 年経っても国連で一切取り上げられず、黙認され続けている。

しかもムクウェゲ医師は、報告書が黙認されていることに 2 回も言及した。そのうえで、報告書を受け止めて行動を起こさない国連を暗に批判したのだった。

ルワンダ政府への批判をにじませる

第 2 に、戦争犯罪に関与し続けている政府とその同盟国（特にアメリカとイギリス）を批判した点である。演説では次のように指摘している。

性的暴力を容認する指導者を歓迎することをやめなくてはなりません。国家はそういった指導者にレッドカーペットを敷くのではなく、戦争の武器としてレイプを使用することに反対するレッドラインを引く必要があります。この赤い線は、これらの指導者に経済的、政治的制裁を科し、裁判所に連れて行くことになります。正しいことをすることは難しくありません。それは政治的意思の問題です。

ムクウェゲ医師は国名こそ言及しなかったが、コンゴ、ルワンダとウガンダ政府の責任に触れたのである。特にルワンダ政府を批判したかったと思われる。

ルワンダ政府軍は、1996～1997 年にコンゴへ侵攻（第 1 次コンゴ戦争）、1998～2003 年にはダイヤモンドの搾取をめぐるウガンダ政府軍と戦闘し、少なくとも 1200 人の市民を殺害した（第 2 次コンゴ戦争）。

ルワンダ政府軍の兵士たちはこれらの一連の過程で女性たちをレイプしている。ルワンダ政府軍とルワンダ反政府勢力の要員に犯された被害者は多く、「（現職の国家元首の中で）最も重要な戦争犯罪人」と評されるカガメ大統領の責任は重い。

さらに、性的暴力を容認するコンゴの指導者・政府を歓迎する国家、つまり政府開発援助などを拠出する大国をはじめ各国政府の責任も強調された。何を隠そう、戦争犯罪人と非難されているカガメ大統領はアメリカとイギリスの支持を受けて今の地位を確立している。

コンゴでは法の支配と正義がないがしろにされ、性的テロの主要な加害者が不処罰のままにいる。厳密に言う、加害者が犯した罪が明白になっているにもかかわらず、その事実が黙認されている。加害者と利権関係を持つ現地政府は、演説でムクウェゲ医師が指摘したように、大国政府によって赤いカーペットで迎えられている。

事実、2002 年の設立以降、国際刑事裁判所（ICC）はコンゴ東部の性的テロの主要な加害者を訴追したことはない。また、ルワンダ国際刑事裁判所（ICTR）は 2002 年、ルワンダ現政府の容疑者を初めて起

訴する準備をしていたが、ルワンダの強力な同盟国であるアメリカ・イギリスが圧力をかけ、国連安保理によって検察官が取り換えられた。

無関心にノーを

資源大国のコンゴでは天然資源をめぐる争いが絶えず、結果として性暴力の被害者が止まらないわけだが、日本を含む大国政府は携帯電話などの原料となる鉱物をコンゴから輸入し続けている（参考：コンゴの性暴力を止める責任は日本にもある）。

日本に限って言えば、政府が 1993 年以来開催しているアフリカ開発会議（TICAD）の招聘者には、問題の当事者であるコンゴ、ルワンダ、ウガンダの各国政府の国家元首もいる。

ムクウェゲ医師は演説の最後にこう述べている。

「この 20 年間に流血や性的暴行、人々の大規模な避難を経験したコンゴ民主共和国の人々は、政府が市民を守る責任を負うことを切実に待っています」

コンゴやルワンダの無責任な国家元首の招聘や政府開発援助を通して、市民の税金が間接的に紛争下の性暴力を助長している実態に向き合い、日本人のわれわれも「無関心であることにノーと言うべき」（ムクウェゲ医師）だろう。

#MeToo のうねりを受けて



ノーベル平和賞を受賞したムクウェゲ医師 (提供 コンゴの性暴力と紛争を考える会)

殺戮への無関心

そう、ムクウェゲ医師はノーベル平和賞授賞式の通説でも触れたが、コンゴでは1996年以降600万人が殺戮された。そのうち、女性や少女は約250万人に達する。殺戮に無関心な我々の見方は問題があるのだ。

慰安婦問題にも言及

第2に、メディアの中に、紛争下の性暴力の問題をアフリカや中東の人々が犯している罪として取り上げ、ほとんど日本と無関係である

筆者はこの20年間コンゴに関わり、2010年以降、ムクウェゲ医師の活動を日本に発信し、医師の活動を描いたドキュメンタリー映画『女を修理する男』(原題「The Man Who Mends Women」)に日本語字幕を付けて全国各地で上映し、同年には医師の初来日を実現した。

そのため、ノーベル平和賞の発表以降、日本のさまざまなメディアから取材を受けた。その一方で、ムクウェゲ・オスロにおいて、ノーベル平和賞授賞式の模様をコンゴメディア・ラジオ・テレビ・新聞・雑誌などに伝えた。また授賞式後にコンゴ人が主催した祝賀会にも参加して、ムクウェゲ医師が国人に向けて演説にも耳を傾けた。その一連の経緯で、日

注目の理由は?

第1に、さまざまなメディアがムクウェゲ医師の業績と紛争下の性暴力に注目している理由に關してだ。当然、ノーベル平和賞という世界で番格式の高い平和賞であること、紛争下の性暴力が性的欲求を満たすなど一般的なレイプであるだけでなく、政治的・経済的支配の目的で行われ、特に性器を壊すことも多いという受けた苦痛を医師が告発してきたこと、そしてアフリカ人の成功例を強調していることなどが挙げられる。その上「性」という言葉が興味を惹くテーマであることも注目度が高い要因であると思われる。

もう一つ、第2次大戦後に起きた紛争としては世界最多である数多くの犠牲者を出している。しかし、同じ紛争に関連する出来事であっても、多数の市民が殺戮されたことは、性暴力と異なっている。セクシーではないため、また上記のフレ



「他人事として認識している可能性が高いことだ。日本とコンゴ紛争のつながりについては、コンゴの紛争地域が有する豊富な鉱物資源が挙げられ、その略奪と利権がコンゴ紛争の長期化の原因にもなっている。その鉱物の中でコルタンは、我々が日常生活で使用するスマートフォン、パソコンや電気自動車などに使われており、コンゴの紛争地域産のコルタンが含まれている製品を消費することで紛争を助長することになる。それについて明記するメディアがいくつかある。一方で、日本が関与した慰安婦の問題も紛争下の性暴力であったと見なされるメディアは皆無である。

実はこの慰安婦問題に關して、ムクウェゲ医師は初来日の際、東京にある、戦時性暴力や「慰安婦」問題を伝える資料館「アクト・オブ・ミューシアン」を訪ね、また2016年、韓国でソウル平和賞を受賞した際に、「日本政府は被害者の(元慰安婦の)要求を受け入れ、救済を求めなければならない」とコメントした。そのためか、今回の受賞に關して、日本政府は同様の声明も発表しておらず、筆者が知る限り、それを指摘するメディアも皆無である。

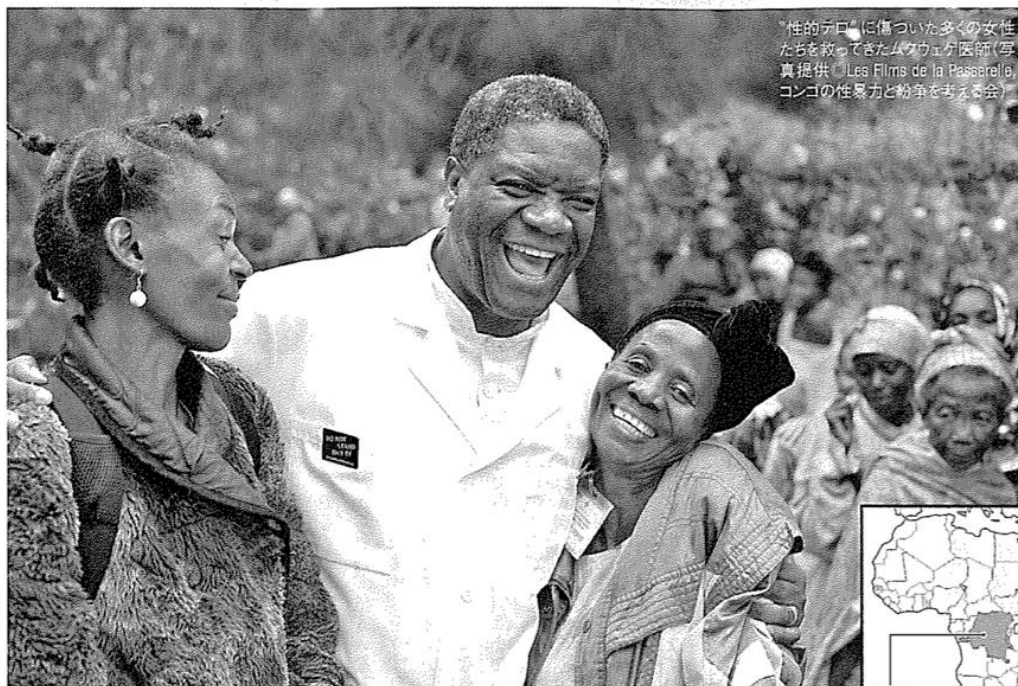
安倍総理大臣は13年の国連総会で、グローバルな課題への対応として、女性の権利の保護・促進の分野で、国際社会との協力及び途上国支援を強化する意思を強調した。もし安倍総理大臣が「女性の権利社会」の構築を真剣に重要視しているならば、受賞者2人の実績を詳細に、祝福すべきではないだろうか。

メディアはノーベル賞の発表時期の10月から授賞式の12月までのノーベル賞の「ゴールデンタイム」のみでなく、引き続き紛争下の性暴力の問題を積極的に取り上げ、解決に向けた議論のきっかけをつくってほしい。

●ムクウェゲ医師のノーベル平和賞受賞に寄せて
コンゴの大量殺戮、
「慰安婦」問題にも目を

●米川正子

ナディア・ムラドさんとともに2018年ノーベル平和賞を受賞したのが、コンゴ民主共和国(以下、コンゴ)の婦人科医デニ・ムクウェゲさんだ。ムクウェゲ医師は1999年にコンゴ東部のブカバにパンジ病院を設立し、これまでに5万人以上のレイプ・サバイバー(性暴力被害者)の身体・心理両面での治療にあたってきた。ノーベル賞委員会は「戦争や武力紛争の武器としての性暴力」撲滅への貢献を授賞理由に挙げている。立教大学特定課題研究員で、「コンゴの性暴力と紛争を考える会」代表の米川正子さんの寄稿。



“性的テロ”に傷ついた多くの女性たちを救ってきたムクウェゲ医師（写真提供：Les Films de la Passerelle、コンゴの性暴力と紛争を考える会）

ルポ ● あなたのスマホもその悲劇の一因かもしれない

ノーベル平和賞を受賞した コンゴの医師が告発する “性的テロ”とは

取材・文 古川美穂 ふるかわ みほ / フリーライター

■「世界のリイブの中心地」
2018年12月10日にノルウェーの首都オスロで行われた、ノーベル平和賞の授賞式。壇上のデニ・ムクウェゲ医師の口から語られたのは、信じがたいほど凄惨な性暴力が繰り返られるコンゴの現実だった。
〈ある日病院に、一本の電話がかかってきました。泣きながら、「お願いです。今すぐ救急車をここに寄せてください」と。2時間後に病院へ到着した救急車の中には、生後18カ月ぐらいの小さな女の子がいました。彼女は大量に出血しており、ただちに手術室へ運ばれた。私が到着した時、看護師は全員むせび泣いていました。赤ん坊は膀胱、性器、および直腸に激しい傷を受けていたのです。明らかに大人によって“貫通”

2018年のノーベル平和賞受賞者の一人、デニ・ムクウェゲ氏は、紛争下の性暴力と闘ってきた婦人科医であり、人権活動家だ。出身地であるアフリカ中部のコンゴ民主共和国では、現在もリイブが「兵器」として使われている。性暴力がなぜ「兵器」なのか。そして、その目的は、私たち日本人の暮らしにも実は繋がっているのだ

されたことが原因でした。

私たちは神に祈りました。どうか今私たちが目にしているのは悪い夢だと言ってください、と――。

また別の赤ん坊が到着した時、気がつきました。この問題は手術室だけでは解決できない。我々は残虐行為の根本原因と闘う必要がある。

立教大学の研究員で、元・国連難民高等弁務官事務所職員の米川正子さんは今回の受賞についてこう語る。

「ムクウェゲさんは婦人科医として性暴力の被害者を5万人以上治療してきました。ここで言う性暴力とはただのレイプではなく、異物や銃などを使って性器を破壊するもの。彼はそうした暴力によって生じる傷を治療する世界一流の専門家とされています。でも彼がすごいのは、医療活動や被害者の支援をするだけでなく、こうした問題に関して世界中で演説を行い、女性の人権問題について訴え続けていることです」

コンゴ東部などの紛争地で多発する集団的、計画的な性暴力を、ムクウェゲ氏は「性的テロリズム」と呼び、糾弾。そして国内だけでなくコンゴビアやボスニアなどの紛争地域で性的テロの被害を受けた女性たちと会い、ネットワークを作る活動もしている。また、コンゴ国内では性暴力の加害者が処罰されない現状を問題

視し、法律相談所を開設。あらゆる角度からこの問題の解決に力を入れている。

性的テロリズムは核兵器や化学兵器と同じ非人道的兵器であり、全世界で厳しく禁止されるべきだとムクウェゲ氏は主張。そのために武装勢力から暗殺されかけたこともある。

「国連で『紛争下の性的暴力担当国連事務総長特別代表』を務めていたマーゴット・ヴァルストレム氏は、10年にコンゴ東部を『世界のレイプの中心地』と表現しています。性暴力の被害者は女性に限りません。一部の男性もレイプ被害に遭い、その多くは自殺を選ぶという現実があります。そのような場所でもムクウェゲさんが続けている命がけの活動は、

ノーベル平和賞以上の価値がある」と米川さんは言う。

だが、どうしてこのような残酷なことが起きるのだろうか。性的テロリズムの目的は一体何なのか。

豊かな資源が性的テロを生む

コンゴはアフリカ中央部に位置し、周りを9カ国に囲まれた国だ。アフリカで2番目に大きな国土面積は日本の約6倍で、ほぼ西ヨーロッパに匹敵する。

「東部は特に美しく肥沃な土地で、アマゾンに次ぐ世界第2位の広大な熱帯雨林があり、農業にも牧畜にも適しています。湖があつて魚も獲れ、地下にはメタンガス、鉱山にはスズ、

寄せたこと。その中には虐殺の首謀者も交じっていた。彼らが一部の難民キャンプを軍事化。彼らの存在が「国家の安全保障」を脅かすと認識したルワンダ政府は、96年にコンゴ東部を侵襲した。

「ルワンダは日本の四国より少し広い程度の小国ですが、人口密度はアフリカで一番高い。だからルワンダ政府は豊かな資源を持つ広い土地が必要だった。事実上、コンゴ東部は98年以降、ルワンダ軍に偽装占領されています。紛争といえば一般に敵同士が戦うイメージですが、コンゴの場合は少し違う。同じ人物がコンゴ国軍と反政府軍双方に所属することもあるなど、非常に複雑でわかりにくいのが特徴です。混乱状態を意図的に作り、民族対立を煽って紛争を長引かせ、地下資源を略奪、搾取する。その背後にはアメリカやイギリスなど大国の姿もあります」

近隣諸国をも巻き込んで「アフリカ大戦」と呼ばれた第二次コンゴ紛争（98～03年）が終わり、03年には和平合意が成立。公式には紛争は終わったとされるが、コンゴ東部ではその後もコンゴ軍と複数の武装勢力が地下資源を求めて争いを続けてきた。その数は現在、70とも100ともいわれる。

こうしたなかで性的テロリズムが



この地図の行政区分は1997年から2014年までのもの。北キヴ州・南キヴ州では特に紛争が激化している（地図作成◎華井さん）

タンタル、タンングステン、金などの天然資源が埋蔵されている。実はこの豊かな資源が紛争を生み出す元凶なのです」と前出の米川さんは説明する。きっかけは1994年に隣国ルワンダで大虐殺が起こり、ルワンダからの難民が大量にコンゴ東部へ押し

行われるのは、加害者にとって2つの利点があるからだ」とムクウェゲ氏は言う。

まず、銃も弾薬もいらないのでお金がかからず、かつ死体のような「証拠」が残らないこと。被害者側は暴力の痕跡を他人に見せづらく、被害を訴えにくいのがレイプの特徴だ。もうひとつは、性的テロリズムの残虐さを見せつけられた住民が抵抗する気力を失って従順になること。その結果、彼らは過酷な鉱山労働に従事せざるをえなくなる。また、女性の性器を破壊することで長期的に鉱山地域の人口を減らし、より支配しやすくするというメリットもある。まさに「兵器」や「戦略」として性暴力が使われているのだ。

■ 女性たちの強さに支えられて

ムクウェゲ医師は55年、当時ベルギー領コンゴだった南キヴ州のブカヴで宣教師の家に生まれた。若くして医学を志した氏は、隣国ブルンジの大学から地域の病院勤務を経て、フランスのアンジエ大学で産婦人科学を学ぶ。当時コンゴでは産婦人科医の数が足りず、出産による合併症などに苦しむ女性を救いたいという思いからだった。99年、ムクウェゲ氏は故郷のブカヴにパンジ病院を設

コンゴ民主共和国 紛争の歴史

13～17世紀	コンゴ王国として栄える
1885年	アフリカの植民地化が進み、ベルギー国王の私有地・コンゴ自由国となる
1908年	統治権がベルギーに譲渡され、ベルギー領コンゴに
1960年	独立を果たしコンゴ共和国になるが、4つの政府が正当性を争うコンゴ動乱が発生
1964年	モブツがクーデターによって政権を掌握、97年まで32年間の独裁体制に
1971年	国名をザイール共和国に
1994年	隣国ルワンダで発生したルワンダ虐殺により難民が流入。難民キャンプが軍事化
1996年	第一次コンゴ紛争が発生
1997年	モブツ政権が崩壊し、コンゴ民主共和国に
1998年	第二次コンゴ紛争が発生
2002年	ブレトリア包括和平合意が成立（コンゴ紛争を終結させるための平和協定）
2003年	暫定政府が発足するが紛争状態は続き、特にコンゴ東部は無法地帯に
2013年	国連による本格的な武力介入が始まる

立する。だが最初の患者は妊婦ではなく、性器を銃で撃たれたレイプ犠牲者であった。そして、性的テロリズムとの終わりのなき戦いが始まった。資源紛争の問題に詳しく、米川さんとともに「コンゴの性暴力と紛争を考える会」を立ち上げた、東京大学政策ビジョン研究センターの華井和代さんはこう語る。

「10年の夏、コンゴ東部で反政府武装勢力が街道沿いの村を次々と襲撃。5日間で387人が性暴力被害を受けました。12年には国軍側が126人を対象に同様の事件を起こします。武装勢力の首謀者は『国際社会にアピールするためだった』と計画的犯行を認めました。つまり、この地域は自分たちの支配下にあると示威するためだ。最悪のアピールです」

ムクウェゲ氏はこうした大規模な強姦被害を12年に国連で報告し、コンゴや周辺諸国の政府の対応を批判した。だがその直後、武装勢力によって自宅を襲撃される。友人でもあった警備員が殺され、かろうじて難を逃れたムクウェゲ氏は家族とともにヨーロッパへ逃亡。

彼に救われた女性を中心とした大勢の住民は、ドクター・ムクウェゲの不在を嘆いた。彼らはバイナツブルや野菜を売ってお金を貯め、航空券の費用を作り、氏にコンゴへの帰国を求めた。「もしも暗殺の危険があるなら、私たち女性全員が交代で見張って先生を守る」と言っ

ある。その中に、女性たちの声に添えて帰国する氏の姿と、喜びに沸き立ち、歌い踊りながら迎える住民たちの生き生きとした姿が映し出されている。

現在ムクウェゲ氏は病院内に住み、PKO部隊に24時間の身辺警護をされながら活動が続いている。

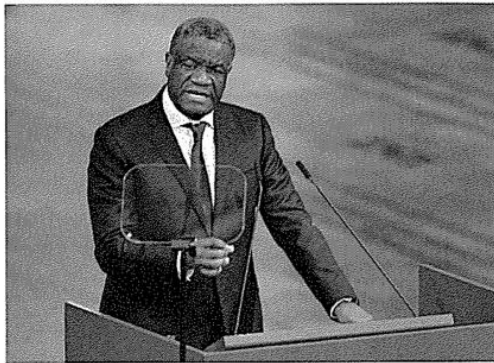
「コンゴの性暴力と紛争を考える会」はベルギーの映画制作会社と交渉し、寄付を募って自分たちで日本語字幕を付け、16年にこの映画を日本でも上映。それに合わせ、ムクウェゲ氏を日本に招聘した。

日本でムクウェゲ氏をアテンドした前出の華井さんはこう語る。

「来日されたときに、ご本人に尋ねたのです。人類全体に対して絶望してもおかしくない過酷な状況の中で、どうして何年もこんなふうに向き続けていられるのですか、と。ムクウェゲさんは、『それは女性が強いからです』とおっしゃいました」

自分が手術をした女性たちが目を覚ました瞬間、最初に口にする言葉があると、ムクウェゲ氏は言った。「子どもたちは無事なの？」「あの子はお腹を食べているの？」。

「自分がこんなにつらい状況なのに、まず家族を思い、子を思う女性たちの強さ。そして野菜を売って航空券を買い、ドクターを襲う人がいるな



2018年12月10日、ノーベル平和賞授賞式でスピーチするムクウェゲ氏
(写真提供©AFP/アフロ)

「私たちが交代で家の周りを見張るから帰ってきてくれと言おう。そういう女性たちの強さが、自分に力を与えてくれるのだ、と」(華井さん)

■ 日本も 無関係ではない

私たちは、このような悲惨な出来事を「遠い異国の悲劇」だと思ってしまうがちだ。しかし実は、この問題は日本とも無関係ではない。紛争資金源として利用されている鉱物(紛争鉱物)は、携帯電話やパソコンなどの電子機器から、電気自動車やドローン、航空機にいたるまで、あらゆる工業製品に使用されている。

自分にも責任はないのか。 そういう居心地の悪さを感じるのって、 実は大切なこと

紛争鉱物の中でここ20年ぐらい特に注目されているのが、コルタンというレアメタルだ。日本で大量に消費されるスマートフォンやパソコンにも、品質の良いコング産のコルタンが含まれている。

「10年以降は欧米先進国で紛争鉱物取引の規制が広がり始めていますが、まだ十分な効果は見られていません。密輸も相行われている。また鉱物規制によって武装勢力が鉱山から撤退し始めていますが、その代わりに鉱山周辺の道路に石を置き、通行する車を止めて行われる強制徴税などが頻発しています。コング東部の武装勢力による死者数と暴力の件数は今も減っておらず、性暴力も17年には増加している状況です」と華井さんは言う。

ノーベル平和賞の授賞式で、ムクウェゲ氏は紛争鉱物について、このように述べた。
「誰だって素敵な車や宝石、そして電子製品が大好きです。

私もスマートフォンを持っています。しかしこうした商品には、コングの鉱物が使われていることがあります。それらは非人道的な環境下で、若者や子どもによって採掘されているのです。あなたが電気自動車を運転するとき、あなたがスマートフォンや宝石を称賛するとき、こうした製品を作り出している人のことについて、少しだけ考えてみてください。消費者の一人として、これらの製品が人間の尊厳に敬意を払って製造されるようにと主張しましょう。この悲劇に見て見ぬふりをするのは、加担しているのと同じことです」

米川さん、華井さんらは昨年末、ムクウェゲ氏の受賞を祝いにオスロへ駆け付けた。だが印象に残ったのは授賞式より、その後の祝賀会での氏の言葉だったと華井さんは振り返る。

祝賀会には難民・移民としてヨーロッパをはじめ各国に住むコング人を中心に、800名もの人々が集まった。「祝賀会は夜8時半から午前2時までの企画で、最初からコングの方々

の盛り上がりすごかった。われらの英雄が受賞した。ご本人は日付が変わるころ到着しました。しかしそのスピーチは、浮かれていた会場の空気が変わるような内容でした」
「ここに來ることができると皆さん。あなたたちは情報にアクセスできて自由に発言できる。しかし祖国で今何が起きているか思い出してください。もし今ここにいるみんなが本気で自分の責任を果たしたら、この状況を変えることもできるのではないかと」
そのような内容を15分ほど語り、氏は退席したという。

「レスポンスビリティ」という言葉を何度もおっしゃっていました。責任。私もそうですが、居心地の悪さみたいなものを感じた方も多かったと思います。自分にも責任はないのか。もつと何かできることがあるのではないかと。そういう居心地の悪さを感じるのって、実は大切なことだとも思いました」(華井さん)

筆者もそうだが、多くの人は遠くの悲劇に同情しても、責任の一端が自分にあるかもしれないと考えると途端に目をそらしたくなる。だが、すべてはそこからのかもしれない。関心を持つこと。調べる。真実を知ること。誰かと語り合うこと。意見を表明すること。そんな小さな行動から一歩が始まるのではないかと。

謝辞

2018 年度の活動に際して、多くの方々のご支援をいただきました。

ASVCC 主催イベントの登壇者として貴重な論点を提示いただいた方々
上映会や講演会を主催・共催いただいた方々
研究助成をいただいた高木仁三郎市民科学基金様
ご寄付をいただいた個人支援者の皆様
コンゴの問題を取り上げてくださったメディアの方々
運営スタッフとして時にはボランティアで活動を支えていただいた方々

厚く御礼申し上げます。

2019 年 5 月 コンゴの性暴力と紛争を考える会 一同